

第拾三號

文明之母第十三號目次

文明之母第十三號附録目次

本誌ハ毎月二回（三日十八日）に發行す
本誌ハ前金に非れバ發送せず
本誌の定價ハ一冊金六錢六冊半年分金六十八錢廿四冊壹年分金一圓卅錢
　全國無遞送料
本誌の廣告料ハ（六號活字廿四字詰）

行	（壹回）	（二回以上）
壹行	金八錢	金七錢
三十行（半頁）以上	金七錢	金六錢
六十行（壹頁）以上	金六錢	金五錢

本誌の見本ハ郵券七錢を送らるれバ呈す
本誌の代金御回送の節ハ内國通運早達便又ハ東京郵便局へ御振込被下度
郵券代用ハ一割增
本誌の前金將に相切れんとする時ハ其卷の宿所姓名を朱書して發送をへし然るも尚御回送無之節ハ直に發送を止むべし

版權所有

發行兼編輯人　中村一　東京深川區[illegible]町十三番地
印刷人　小西石造　東京深川區仲町八番地

發行所　東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地　生文社

天長節

あまてらしあまねくめくみをほどこすきみか代
みなもとにつかふるもちのはらふなり　弘綱

菊数千枝

ときはなるよろつ世ちよにさくきくのちえのかすしらぬ　紀

のあきらけきみよのかきりなき　雄

文明之母第十三號

文明之母

明治二十二年十一月三日發兌

○天長節に際して所懐を述ぶ

今日は是れ十一月三日、吾人三千八百萬の日本人民が謹んで寶祚の無窮、聖壽の萬歲を祝し奉るの天長節なり。宜なるかな、獨り有情の者に限らず、無心の者までも祥を含み瑞を呈し、嬉々の色を現はすや。天鷄の喔々たる、既に昨日に異なりて喜ばしげに、旭日の瞳々たる、亦今日は殊に麗はしく、白扇倒に懸くる富士の山は、高く千秋の雪もて、五雲の中に聳え、明鏡拭ひ出だせる琵琶の湖は、長へに太古の水を彩霞の裡に湛へ。菊花籬に開いて君が代の千代を壽ぎ、國旗門に飄りて太平の風に靡く、千門相似たり、萬戶一の如し。都下に住する者は、祝砲一百一發の響を聞いて、皇族大臣の金裝燦爛として參朝せらるゝを見るを得べし。田舍に家する人は、心目の寥朗を恣にし、緩步の從容に任せ、軟々の纖草に藉り、落々の長松に蔭し、而して翔鸞の裔々たるを覩、鳴鳳の喈々たるを聽くを得ん。吁誰か今日の佳辰に際して、鼓腹擊壤、ひとしく萬歲を唱へざらんや、擧ツて昇平と祝せざらんや。　吾人は熱心に此の佳節を祝す、又熱心に日本人民が悉く

此の佳節を祝するを祝す。　之を祝すると同時に吾人は聊か又我が文明之母に就いて祝せる所あらんとするなり。

我が文明之母は實に昨年十月十五日を以て、はじめて社會の愉快なる大氣を呼吸したり。而して其の發行早々、懷抱せる所の主義を告白したり、曰く、「吾人は純然たる漸進主義を主張する者なり、隨つて取捨折衷の止むを得ざるを主張する者なり。　故に衣服も一概に西洋服ならざるべからず、食物も一概に西洋食ならざる可からず、家屋も煉瓦の層樓ならざる可からず、宗教も最美最完の耶蘇ならざる可からず、　頭の上には西洋風に束髮す可し、足の先には西洋風の細履を穿つべし、女子の權利を擴張すべし、女子の交際を自由にすべし、結婚不羈の良俗は取るべし、男女交際の美風は盛んにす可し、と一にも即西洋、二にも即西洋、と頻に急進を主とする論者に向つては、舌の在らん限り筆の續かん限り、吾人の旨義の極言極論して止まざらんとす。」と吾人は大聲疾呼したる積りなりき、然れども世人には僅に呱々の聲と聞かれしなる可し、又實際呱々の聲に過ぎざりしなる可し。　然りと雖も幸に有名大家の贊翼を蒙ふり、貴女紳士の賞讚を辱ふし、日に社運の隆盛を致し、月に增刷の止むを得ざる至りしは、實に吾人の厚謝する所なり。　殊に日本島は勿論、白皚々たる北海道の寒天地より、綠萋々たる琉球の暖乾坤に至

るまで、我が文明之母の讀者あらざるなきに至りたるは、實に吾人の意外に出でたるものなり。斯く意外にも文明之母は滿天下の人々に愛顧を受けたれば、常に聊か之に酬ふる所以の道を思考せり。惟ふに社會日に進んで、萬般の事物ますます頻繁なるを以て、吾人は本誌の每月一回の發兌なりしを、本号より二回の刊行とし、いよいよ盛に持說を吐露し、所見を直論せんとす、蓋し是れ讀者の厚意に酬ふる最第一の事と信ずればなり。兎に角是を本誌第一着の生長發達として、吾人は自ら祝す。然りと雖、是も彼も幸に今日の聖代に際會したればこそ、實祚無窮！　聖壽萬歲！

論説

○婦女子一般の德義を論じて婚姻に及ぶ

關場不二彦稿

生活の頂上を極め、間斷なき幸福を貪る者は、愛情、豈にあらずや。（ゲューテ）

人間兩性の關繫は全く動物兩性の關係と異なるものにして、動物の性欲は規則ありて起り、且暫時の者にして一歳中定期を以て限制せらるゝ者なれども、人は性欲の爲に困難なる義務を負ひ、幷にまた快美なる歡樂を獲、其の性欲は不斷のものなり。唯人間

に在りては、他の動物よりも遲く發生するものにして、其の發生に際しても生理的直に自ら其の性欲を滿たさしむることを禁ぜしなり。一は乃ち健康を毀損し、一は此の性欲を實行するに當り、一家を形成せざる可からざればなり。一家を形成する事は至難にして、人間性欲に起りて后直に作し能はざる所たり。苟も一度其の性欲を滿たせば、動物に於ては性欲一時鎖滅すと雖、人に在りては之と共に性欲を喪ふ者に非ず。故に人は永續持久其の性欲を保ちて、遂に子々孫々と繩々たらしむるなり。其の子孫は必他の保護(養育教育)を須つ者なれば、之を産せしものは之が爲に相共に之を保護養育するの義務を有す。是れ永久の持續する一夫一婦の起由なり。

數多の動物は其の性欲を滿足して後互に相分離する者にして、匹偶與に生活する者は僅少なり、縱令之有るも皆暫時の間にして以て其の兒を養ふに足るのみ。之に反して人間は夫婦互に其の子の爲に密に連繫せられ、其の性欲といふ者は其の子を養成教育する爲に、殆と其の實力を喪ふ者にして、又小兒は雙親及姉妹と孝悌を以て相連繫を。是に於て家族相團欒し、最美なる社會の德義を産出するなり、乃ち親愛、從順、尊敬、禮節、耐忍、克己、撿束等の如き是なり。

即ち天賦の性欲は社會の美德を生ぜり、然れども婦人の德義に就き古賢の喋々する

は何ぞや、又史乘に於て敢て美なりといふを得ざる徳義を以て、冊紙を汚す者あるは何ぞや。曰く婦女子は力微にして克己の精神足らず、動もすれば悍馬御す可からざるの性質を現出し來り、醜行を顧る克はず、不徳も抑制するを得ざるに至るヿを以てなり。苟も婦女子たる者は、其の感覺Feelingを制するを學ぶべきなり。此の感覺は宜しく靜謐にして風波なき江流の如くなるべし、決して巖石に激突して濆沫を蕩上せしむべからず。平和にして温柔、之を婦女子の美徳といふ。之を反言すれば、温柔の性は則ち過剩の感覺と、己に克ち能はざるの我欲を箝制するよりして生じたる一の習慣性にして、決して懦弱爲をなく、蒲葦折れ易きの比をいふヿ非ず。折れ易きの蒲葦ヿは、折れ易きの心髓あるべし。然れども我欲を箝制し、無益の感覺を壓束するの性質は、即ち剛毅の性力ありて然り。　元來婦女子は此の剛毅の性力を貯藏し、之を蓋ふに天然ヿ獲たる美容優姿を以てす、之と比例せん爲、剛毅の性力も餘裕を生じ、顯れて温柔の性となる。是豈完全無缺の美徳に非ずや。好し其の容貌の優美なるヿもせよ、其の心中は蒲葦と一般ならば、機會を得て一折し、我欲の鬼奔騰し、不徳の性其の赴く所を盡すなる者、世上少しと爲さず。蓋し世人は之ヿ就き又罪を懷ける者なり。何ぞや。曰く世人は婦女子の美容なるヿは聊かの失行を恕するの習慣を有すればなり。何の故に之を抛棄して問はず、

ざるや、小疵已に咎めずんば大瑕之より起らん、大瑕已に生じて又制する能はざるを如何せん。是に於て婦女子は温柔の美徳に代ふるに、姦邪猛惡の性を以てせり、宜しく之を史上に徴し、又古賢が誡言を見て察す可きなり。牝鷄の晨するも、上履の下に俯伏せしむる(婦が夫を壓するの西諺)も、皆家の索くる基にして、社會の秩序紊れて而して理せず、美徳また何れにか之を求めんとする。もと性欲は婦人に在りては、男子よりも偏して且強なれば、古人は婦女子を以て性慾の動物と渾名せしなり。

徳義ありて而して後社會は婦人に位置を與ふるとは論を俟たず。間斷なく此處彼處に長舌を振ひ、高聲にて談笑し、或は他の長短を評し、或は禮節を重んぜずして、遂には尋常に道を亂るに到りて、社會の位置は何處に於て其れ等婦人の席を設けんと欲するぞ。嗚呼知らずや、社會の秩序は常に亂れ易きの傾向ある者なるを。即ち人生到る處として迷路なきに非ず。例之バ一少女が一少年と面相對するの時 Tete a tete ありとせんか、婦人の美徳は危きこと恰も夭々たる美花の、暴風の爲に吹き散らされんとするものと相似たり、芳香四もに飄り、空しく人嘆を招かんのみ。然れども苟も剛中柔外の性有らば、此の時何ぞ迷路に陷らんや、何ぞ暴風下の美花とならんや、と言えんか、否々婦女子は其の一個人に於て、護身の材器なきを如何にせん。護身の材器はなし、此れ實に社

會に於て重大なる事にして、婦人は之が爲に一の男子に依賴せざる可からざるなり。又男子は姿強援弱の主義を以て其の婦女子の護身役たるべし。是に於て夫唱婦從の言も起りしなり、蓋し男子の性は危き者なり、衆人に對して操行完全なるも、一個人の時一婦人に對して、其の性を變ずる者なきにしもあらず。婦人の注意一に此にもあるべきなり。何れの事にも依らず、一の分、一の秒として靜心閑思、事變に逢ふて其の守を易へざるは婦德の要なり。然れども彼の怯懦、事是れ恐れ、男子に對して唯首を俯し席を刮し、時々樣々に其の容を仰ぐ等の事は、是れ美なる恣態に非ず。

時としては七情を動かすの時なきにあらず、之を節制して而して后婦德益々顯はるるを見るなり。請ふ見よ幸福を極むる各時だも、或は千滴萬滴の熱淚を以て、或は無限の憂愁を以て、之に代らしむるの時あるを。例之ば其の夫の遠遊に際し、暫く別れざる可からざるの場合に於いては如何、永世之と幽冥路を異にするの別に到ツては如何、心中の愁嘆哀慟、方に是時より甚しきはなかるべし。是時に當り社會の慣例も、常禮も皆婦人の希望する所に反するなり、蓋し婦人が剛中の性是時に於てこそ顯はすべきなれ。七情を抑壓しく之を裹み、而して后社會に臨まば、其の婦德や美といふべきなり。彼の雲鬢亂れて花容損し、或は忽ち桃花の面を狂扮し、音聲は幽鬼の哭するが如く、白晝猶

譫語して、其の夫が遠國に於て重病殆んど瀕死なるを浩嘆し、枉樞を繞ツて空しく昊天に號泣するの事ありとせんか。是其の内情の切なるは愛すべしと雖、外方に向ツて其思慮なきの極度を示すものといふべし。蓋ぞ迅かに行裝を理して之が難に赴かざるや、之を社會の婦德といはゞ非ずや。

天は美麗なる精神を賦與し、美麗なる丰姿を添へたり、内外共に潔白にして端嚴なり、乃ち雙親の喜ぶ所、誇る所にして、名譽男子の婦となり、幸福なる家族の母となる、是れ婦女子が稟賦せられたる最高最美の運命に非ずや。然るに過ちて奸佞諂媚の毒氣を呼吸し、之に麻醉して遂に不德の利己人が狡獪の爪牙に瞞着せられ、高尚なる理想を汚濁し、再び還るを得ざるの迷途に彷徨し去るに到りては、其婦人が纖弱にして事を解せざるを嘆ぜざるを得ざるなり。月老の縁簿之を誤りしか、又何如とも爲すべからずと雖、是婦人が尤も謹む所たりしを知らざるか、愛情は美德なり、之を誤用せしを悟らざるか。獨乙に一女史あり、其言に云く、愛情は妾等の胸中には男子の胸中よりも富贍に含蓄せり、是れ自然の適理にて、妾等は一母親となりて千萬の注意と勞苦とを費すなれば、男子よりも切なる情のなくては叶はぬ事なり、云々。(マリア、フホン、トユーンベルク)此の言誠に理あり。婦人の性質たるや前に陳ずる如く、一般に感覺に富む者にして、能く

想像を畫きて細微を漏すなく、能く感觸を縦にして輕重を衡り易し。是れ即婦人が注意の細かなして、狹少の局所に其の光眸を動かす所以なり。其の身体の構造よりしていふも、固より纖細輕少の者なれば、必ず保護を仰ぐべき者とす、此の保護を獲んには殊に愛情の必要を認むるなり。然れども愛情の起る所は、一に是れ性欲に歸する者にして、心理、生理兩學の説く尤も喋々なるを看るなり。惟ふに其の身体は纖弱にして其の感覺は強旺、其の感觸は細微なり、遂に其の結果如何を尋ぬるに、最も愛すべき徳義羞性、親切なる性、潔癖の三ツを見るなり。

臉上紅を潮し、秋波其の趣を異にす、是の潮紅は心裡の感觸を表せるの羞性なる者にして、恰も是れ寒暑鍼の如く、微細の變動も之を外に表はす者なり。此性は實に欺く可からざるの赤心を示す者にして、ダルウイン氏は之を以て唯人間特有の性となしたり、心動二于内一色形二于外一と古人も亦此性を察せり。此徳義を欠くの婦人は陰險奸媚なり。

親切なる性は婦人の深き情愛より起る者なり。彼の強鷙巨翼を張りて牝鷄の雛兒と奪はんとするに際し、牝鷄が其の身の孤弱を顧みず、熱心之を保護し、忽ち哀叫し、忽ち憤怒し、強鷙を以て僻易膛着たらしむるの勇氣と其の鍾情なるは、また得て言ふべからざる者あり。人の母たる者も如何、玆に愛子あり、毒蟄の爲に其の指を刺さる、母之を見

忽ち其の指を齧み、其の毒液を吸ひ出し、また自ら其の口の糜爛するを顧みざるの例あり。實に其の身を忘るゝの愛情ハ、婦人の美德にして、其れ親切懇懃、事に對し人に對し、諄々然たる者ハ一に忠孝と同一の摯情より起れる者に非ずや。彼の病床に呻吟し、苦痛に悩むの人ありとせんか、慰問安撫到らざるなく、進んで汚穢の事を處理して、更に勞苦の如何を問ハず、自ら看護の任に當り、夜も寢ねず晝も息ハず時として病者の精神を爽快にし、一に其の身を捧げて其の事に從ひ、他人と雖其の義務を盡すハ、豈美なる性質ならずや。余ハ嘗て婦女子の職務話を草し、主として看護のことを述べたり。彼の危難に陷り、百方失意、萬事齟齬し徒に迷途を彷徨たるの可憫者あり、婦人ハ其の身の薄弱之を救ふの力なしと雖、諄々として理を說き方を示し、慰言諭旨、其の懇懃を極め、仁心にして任俠なる且勇氣なる、失意者をして安排事に當らしめ、能く其の迷霧を解き、或ハ其の計略を補助して其の成を成さしめ、(イサベリラ女王の閣龍に於ける如し)或ハ窮夫の爲に衣を製し糧を贈る等、其の例世に少からず、婦人の美德此に至りて極まれりといふべし。此の性を欠くの婦人ハ昏鈍に非ずんバ粗暴なり。概して言へバ親切にして懇篤なるハ婦人の通性に似たり、能く細微に注心して其の意を周旋し、敢て懈怠の心を起さゞるハまた嘉すべきなり。

之に次で最美なる性質ハ潔癖是なり、余ハ此の潔癖を以て大にしてハ婦人の家政に

適し、小にしては衛生に切なるを知る。此の潔癖は一の美術心にして、彼の錯亂雜駁を嫌ふ者なり、乃ち序次を立て、家政を把握し、小心家計を理し、自ら教育の大任に當り、内治宜しきに旋す、皆是の潔癖より生ずる結果にして、其の秩序次第の之に據ッて定まる者なり。其の他衣服身躰并に房室の清潔を保持し、自らは扮粧を以て清潔を事とし、以て害惡を除却し、汚穢は掃拭するの習慣を生じ、家政衛生一大秩序を顯はし、教育の方針も自ら紊れずして、國家の利益も實に之に胚胎するなり。

以上の性質に準標して考ふるに、妻となりて家に居るときは、其家の順序を立て、夫を補佐し、子を教育するは其任たり、而して社會上の歡樂なる夜會等は、勉めて相避くるの時なり、家に在て尊長管理者と仰がれ、外に向て賢母の稱を博し、尊榮其身に鍾まるの時なり、易に曰恒其徳貞と。夫然り、終始其徳を守て變ぜず、磨して燐せず涅して、緇せず、(論語)髧たる彼兩髦、實に維れ我儀、死に之くまで他なからん(詩經)と。此徳儀と以て閨門の範を鑄治し、以て内政を治む、彼の男不言内、女不言外(内則)とは分業の次第を謂ふ、頗嚴格なりと雖、女の内守するは論を俟たず、シルレルが鐘哥行に曰く、内には賢婦の支配するあり、女を教へ兒を防ぎ、拮据事を執りて活計を利し、繅車を廻轉し絨絲麻枲の燦爛たるを喜びて、遂に又息ふを知らず、云々。嗚呼婦人は此の大任を負へ

り、倫理上徳義なかるべからざる得て知るべきのみ。抑も徳義は靈妙なる精神の健康を徴する者なしく、不徳は其疾病たるを示すなり、(ア、ヴットケ氏)而して此靈妙なる詩人的の精神は美なる者なり、何となれば其節調中和にして、宮商律呂に協ふの齊調なればなり。此美なる詩人的の精神よりして親愛の二字を生産し來る、見ずや有爲の少年を見て、親愛の磁鐵相牽き、或は母となッて甘美を極めたる兒守歌となるを。(カイベル氏)親愛の連鎖は内政の細小なるをも處理し、教育の大任をも完全にし、靄々たる一團の和氣をして族親の中に滿しめ、家の基礎を鞏固ならしむ、又一般の社會機關を製作せしは此親愛なり、渾て人間は單獨を以て世に立つ者に非ず(キルヒ子ル氏)縱令一個人の性質相殊異なるも、種屬相合して無數の生理及心理上相類似せる者を連繫するなり。乃ち此共同の連繫に就きては自然に兩性の積消兩極を作り爲せり(太元作ニ兩極一)茲に兩性の相反せる所を叙し、兩性相合するの運動(婚嫁)の關係を述べんとす。

(未完)

家政

○育兒衛生法

營養（二）

關場不二彥稿

前に陳ぜし如く乳母を撰ぶことは頗る難し、如何となれば乳母の年齢は、成る丈け小兒の母の年齢と相等しきを以て善しとすればなり。蓋し乳の成分は其の母の年齢と相變更するを以てなり。其の他乳液は其の分泌期に當り變ずるを以て、母も乳母も相同じき月日に小兒を分娩せるを好しとす。又年長じたる乳母の乳は固形分多きを以て、初生兒には不利なるべし。年齢十三歳より四十歳に至るまでは、乳の固形分少なく、三十歳より三十五歳までは之に富み、四十歳以上に到り極めて減少すべし。又乳母其の小兒を乳するの際、天癸いたるときは乳の固形分增加すべし。是れ注意を要するの一事なり。

乳母の性質に就き猶一言すべきは、乳母の性若し神經質にして、所謂る癇癖ありて憤怒するときには乳の成分多少の變化を來し、或は分泌の量全く減少し、往々乳兒をして啼泣止まざらしむべし、或は其の榮養を害し枯瘦せしむることあるべし。一方よりして之を改め云へば、乳母は温和にして教育を知る者を以て可となす。

因に云く、西洋にては乳母は頗るよき待遇を受くるものなり。斯くせざるときは、

乳母は能く小兒を看ず、遂に一家の不幸を來せばなり。顧みて我が國の狀態を見れば、其の之を擇ぶ既に疎なり、而して之を遇する亦其の道を失す。焉んぞ其の兒の善良に生長し、穎敏に發育するを望まんや。彼の社會改良を以て自ら任ずるの人士が、徒に外形皮相上の小事にのみ局促し、一念是れ等の緊要なる事柄に及ばざりしは、眞に不可思議至極といふべし。

抑も乳液は兒をして生育成長せしむる充分の營養品たるは論を俟たず。然るに之を其の母或は適切の乳母に求むるを得べからざれば、已むを得ず之を動物乳液と人工滋養とに其の法を求めざるべからず。人工滋養とは乳液と相似たる液汁を製し、以て小兒に與ふる營養品をいひ、動物乳液とは哺乳動物の乳液を代用することを是れなり。

動物乳液

茲に動物乳液とは主として哺乳類の乳液をいふものにして、殊に吾人の乳液に代用せしむべきものをいふなり。殊に家畜類の乳液は母乳と化學分析上大に差異あるものなれば、之を用ふるに當り漫になすべからざること多し。茲に一表を出だし世上の母親たる者の參考に供す

乳液分析表（スタイネル氏生理書）

乳類＼一千分中成分	水分	固形分	乾酪素	蛋白質	ペプトン	牛酪	乳糖	塩類無機
母乳	九一四、〇	八六、〇	六、〇	九、四	四、一	二七、六	三六、八	二、一
牛乳	八六六、〇	一二四、〇	二六、二	三、八	三、二	三五、二	三八、一	七、五
山羊乳	八六三、六	一三六、四	三三、六	一三、〇	—	四三、六	四〇、〇	六、二
羊乳	八三九、九	一六〇、一	一五三、四		—	五八、九	四〇、一	六、八
驢乳	九一〇、二	八九、八	二〇、二		—	一二、六	五七、二	
牝馬乳	八二八、四	一七一、六	一六、四		—	六八、七	八六、五	

之を右の分析表に徴して母乳は最も水分に富み、且つ固形分は最も乏しきを知るべし。此れ小兒の胃には消化の作用上適切なるものにして、之に加ふるに乾酪素の如きも胃の酸液に逢ひ、最微最脆の小絮片となり、消化すること頗る宜し。此の性質にて母乳に次ぐものは牝馬の乳液なり、固形分は母乳に次いで驢馬の乳液なり、故に牝馬及び

驢馬の乳液は母乳に次で宜しきものとぞ、山羊乳も亦佳なり。然れども世上の需要に最も充分に供するは牛乳是れなり。牛乳は前陳の如く牝馬、驢馬等の乳汁よりも劣れるものなれども其の供給の充分なるよりして、世上一般に之を用ふるものとなれり。是に於て其の用法を講究せざるべからず、徒に牛乳を濫用して幼生兒の營養を過まる者實に少しとせざるなり。余等嘗て小兒科に於いて數多の病兒を診するに、母親の訴ふる所は、小兒の食欲なく、授乳するに容易に之を吐き、又糞便も其の色を變じ、或は下痢し、顏色も蒼白となり、肥滿の体も漸々減却する事等なり。乃ち一見して其の消化器の病あるを知り、之を乳母或は其の母親に質問して、其の病源を探るに一に授乳の如何に據らざるものなし。例之ば母親、産后身体に障碍を生じ、或は疾病に罹り授乳するを得ざる場合あり、或は更に良乳を充分に分泌せざることあり。此の場合に於て俗習を以て牛乳を用ゆべし、是に於いて初生兒の軟なる胃中に障害し、許多の疾病を醸すに至る、即ち多くは前に記せる母親の醫士に訴ふる是れなり。固より牛乳を用ゆるは惡しきに非ず、唯其の用法の如何を注意せざるを以て此の害を惹き起すものなれば、世上の慈親乃ち養育家は、職として之を知らざるべからず。

渾べて乳汁は其の母の營養の如何によりて、其の成分を變ずることと疑ふべからず。

概しを動物性の食物を攝取するときは、乳液には重もに脂肪と乾酪素とを增し、糖分は減却す。又植物性の食物を攝取するときは、乳液中には糖分を增加し、脂肪および乾酪素、幷に乳液の全量も減却をべし。今又母乳と牛乳とを比較するに、牛乳は第一に消化と稍々澁りする固形分に富み、幷に其の乾酪素の母乳よりも多く、且つ其の顆粒は粗大あり。又諸學士乃分析に徴するに、(前表は一家の私表あり)牛乳は母乳に比をるに糖分少なし、且つ牛乳には無機鹽類多し。

百分中	牛乳(ケエーニヒ氏試驗)	母乳(チデイ氏試驗)
乳糖	四、八二	五、一三六
無機塩類	〇、七〇	〇、二二三

ホッペ、サイレル氏に從へば

	牛乳	母乳
蛋白質	四%	二%
脂肪	三、五乃至五%	三、五%
乳糖	四%	四、八%
無機塩類	〇、五%	〇、一七%

右の比較と參看し、且つ之を實地に驗するに、『牛乳は稀薄にせざるべからず』といふ終結の句と綴り成さしむるなり、之を他の言にていへば、『牛乳には一定の用法あり』と歸納するなり此の用法に據りて可憐なる小兒は其の母親の良乳を得ざるの不幸あるにも關せず、無限の至福を受領するなり。

（未完）

編者曰く、其の精細なる牛乳の用法は次號に之を掲載すべし。

文藝

柿本人麿　　福羽美靜

石見潟、たかつの山の、やまかぜの、高きしらべは、皆あふぎけり。

物部守屋　　鈴木重嶺

流れての、世々經てのちふ、思ふかな、難波堀江の、深きこゝろを。

兒島高德　　永山盛輝

櫻木を、けづりて書たし、から歌は、やまと心の、花ぞありける。

豊臣秀吉　　黒田清綱

今しばし、木下風の、たえせずば、から山までも、抜くべきものを。

くさぐさの歌十首

燈火　たが住める、家居なるらん、呉竹の、葉ごしに靡く、燈火の影。　竹屋雅子

夕鹿　夕風に、おのがさ引板の、音するを、もる人有と、鹿や鳴らん。　大隈熊子

野徑薄　花薄、招くまに〳〵、立よらば、秋の野べにて、日數經なまし。　島田繁子

月前雲　久方の、そら吹風に、浮雲も、月にさてらぞ、なりにけるかな。　有馬部子

田家鹿　さしのぼる、月は田面に、影更て、かりほの庵に、を鹿鳴なり。　近藤捨子

鹿　吹まよふ、嵐の末に、きこゆなり、紅葉の奥の、さを鹿のこゑ。　岡部虎子

秋雨　きり〴〵す、鳴音しめりて、更る夜に、寂さ添て、ふる小雨哉。　石渡忍子

雨後萩　雨晴れて、いよ〳〵色ぞ、増さりける、今を盛の、まその萩原。　前田抵子

朝秋風　いつの間に、身にしむ迄に、成ぬけん、昨日か待し、秋の朝風。　小笠原艶子

擣衣　秋の夜の、月の桂の、花ならぬ、衣うつらし、しづがやまざと。　辻　数子

○秋之夜延漫筆(四)

業務閑なく、漫筆を怠りしこと數月に及べり。今や梧桐葉飄りて、天下復秋となりぬ。舊稿詞拙なりといへども、筆せざんば題名に背かむとて。己丑秋九月、　鈍鳳流士識す。

○衣装を看て傳記を編む　近世英國に一話あり。ある人に物語りけるハ、余に贈るに一婦人が其はる一生涯着々たる衣服裝束を以てましたまふべし、余ハ其の人を見もせずまた知らざるに好く其の一生の記傳を書き得るなりと。此の言まことに理あり、かの古き諺にも、「衣服ハ其ノ人ヲ作ル」といへり。されバ衣服によりて、わゝく婦人に就きてハ平素の行を知るに難からざらむか。

識筆將軍曰、余作裸体畫美人論一篇、掲在前号社説欄内、其中有言、皮肉髮膚、固當現人之思想、然不如衣服裝束一層能表人之性情也、今讀此哲言、益信前論之不謬也、

○舞踏ハ名譽の戰　佛國の佳人某ハ、年老へて後其の過ぎさし盛りの日を憶ひ出だし、懺悔物語を著ハしたり。　其の書の緒にかきつけゝるハ、妾ハ二十年あまりの冬の間に七百二十二の舞踏會に臨みて舞ひ踊りぬ。之によりて喉の病に罹りしこと十四回胸の病に三回また感冒に惱みしこと百二十回許なりき、されど妾ハ決して之を苦とハ

せざりしなり。其の故は舞踏てふものは巴里魂ある婦人の戰爭にして、これより獲たる病は戰爭にて獲たる名譽たかき創傷なればなりと。一讀其の勇ましきを覺ゆ。一結如有意如無意、妙在千言外。

鐵筆將軍曰、舞踏名譽之戰、是有巴里魂婦人之所唱、有大和魂女子之所笑也、

○被衣　西洋の俗に被衣といふ輕羅を花嫁の裝束となせども、其の昔しは之を以て夫妻共同財產の印證となせしなり。合歡の筵に新夫婦は帽子と被衣とを神前の机卓上に載せ、財產は共同となることを誓ひし者にて、譬へば夫若し子なくして死するときは、財產は盡く婦人の有となるなり。夫また此の被衣を裂きたるときは離緣の印證となり、共同の財產はふたゝび分離するものとなせり。

編者いはく、次號よりは鈍凮流士氏が轟雷掣電の筆を以て、駭天驚地の事をしるしたる、「亂世婦人の狀況」てふ一篇を掲ぐべし。讀者須らく刮目して之を待つ可し。

竹取翁物語講義　第九

琴條女史

むかへに人多くまゐりたり、玉の枝をば長びつに入れて、物おほひて持てまゐる、

むかへに云々　歸りきにけりと、殿へつげやりたるに應じて、殿より迎への人來たるなり。　○長びつ　長櫃なり。　○物おほひて　櫃のうへに、きぬなど打掛けたるなるべし。　○持てまゐる　此は難波より都の方へ持行くなり。

大意、殿カラ迎ヘニ人ガ澤山來タ、ソコデ玉ノ枝ヲバ長櫃ノ中へ入レテ、上へ覆ヒヲ掛ケテ持ツテ來タ。

いつか聞きけん、くらもちのみこは、うどんぐゑの花もちてのぼりたまへり、とのゝしりけり、これをかくやひめきゝて、我は此のみこにまけぬべし、とむねつぶれておもひけり、

いつかきゝけん云々都にて人々の言ひさわぐ氣色なり。　○うどんぐゑの花　ぐゑはげを伸ばしたるにて（源氏をぐゑんじ、といふごとく）優曇華なり、此の事は佛書に出でゝ容易くはひらかぬ花なりといへり、まち〳〵て善き機會を得たるに優曇華の花まち得たる心地して、などいふも是れより出でたり、さりながら此處に優曇華の花云々といへるは如何なる意か、前にいへる玉の枝がやがて此の優曇華なるを、はじめには蓬萊といふ山に銀を根とし金をくきとし白き玉を實としてたてる木とのみいひて、此處にはじめて名をあらはしたるにや、はためづらしき枝なればうどんぐゑの花とはいひさわぐにや。　○これを輝夜姫きゝて人々のゝしるを聞きてなり。　○我は此の御子にまけぬべし　まけて勝負の負けにて姫がのぞみたる得がたきものをとりきたりたる故、此の御子にまけて其の心に從はねば得あらぬべし、といふ意也。　ある説にまけはまかせの約にて身をまかせぬべしなりといへり、其のこゝろはおなじことながら、語の解き方すなほなり、考合すべし。　○むねつぶれておもひけり　むねつぶれてはむねやみてなりといふ解あれども、よくあたれりとも覺えず、おもふに落膽の意なるべし、

俗に驚きたるとき「膽つぶした」といふとも異なれり。

大意、何時聞イタラウカ都の雜人共ガ、倉持ノ皇子ハ優曇華の花ヲ持ツテお上リナサレタト評判シタ、此ノ噂ヲ赫夜姫ガ聞イテ、我ハ此ノ皇子ニハ負ケテシマウダラウ、トイツテガツカリシテ居タ。

かゝるほどに、門をたゝきて、くらもちの御子おはしたり、とつぐ、旅の御姿ながらおはしたり、といへばあひ奉る、

かゝるほどに　間もなく來たる樣なり。　○門をたゝきて　赫夜ひめの家の門なり。　○旅の御すがたながら　一ツには早く姫にあはんと心のせかるゝ儘、我が御家へも寄りたまはでおはしたるなり、又一ツには殊更にふかき志のほどを示さん爲なり　○あひ奉る　翁なり。

大意、其ノ内ニ門ヲ叩イテ藏持の皇子ガ來ナサレタト告ゲタ、旅ノ御姿ノ儘デ來ナサレタトイフト、翁ガ出テ御目ニカヽツタ。

御子のたまはく、命をすてゝ、彼の玉の枝持て來たる、とてかくや姫に見せ奉りたまへといへば、翁持ていりたり、

命をすてゝ　命を的にしてといふ意なり。　○玉の枝持てきたる　たるはたりとあるべきなり。此は翁の口より斯くいひて、姫に見せよといふなり。

大意、御子ガ仰セラルヽニハ、藏持ノ皇子ガイノチガケニナツテ、彼ノ姫ノ仰ツタ玉ノ枝ヲ取ツテ來タトイウテ、かくや姫

二見セテ下サレトイフト、翁ガ其ノ玉枝ヲ持ツテ内へ這入ツタ。

此の玉の枝に、文ぞつけたりける、

いたづらに、みはなしつとも、玉の枝を、手折らで更に、かへらざらまし、

文の事は前にいへり。〇いたづらにみはなしつとも　たとひ巳が身はたかくなりぬとも、といふ意なり。〇手折らでは手折らずては、のこゝろなり。〇かへらざらまし　此は今の語ならむかへらましやとかかへらざらんやとか　あるべきなりなどいひ、又はざはぞめの約、ましはみの伸びたるにてみはむと同言なれば即かへらぞあらんやにて　反語なり、など強ひて附會の解釋をするは要なき事なり、此の儘にて見るべし、即簡單にいへば、かへらじといふことなり。　尚此の歌の意を説かんに、玉の枝を取らねば、更に故郷へは歸り來じといふ決心をしめしたるものにて、此樣に覺悟して、此の玉の枝を取り來ぬといふ意をこめたる歌なり。

大意、此ノ玉ノ枝ニ文ガツケテアツタ、シテ其ノ歌ハ、いたつらに、みはなしつとも、玉の枝を、手折らで更に、かへらざらましトアツタ。　〇又一首ノ大意ハ、タトヒ命ヲ捨テルトモ、玉ノ枝ヲ手折ラナクテハ、二度ト歸ツテハ來ナイ。

小説

〇吉野川（よしのがは）

鴨立庵主人

第四　淺き瀨にさをさなれ棹

折しも春の二月はじめ——春とは唯名のみにして、見渡せど艶陽和暢てふ空は見當らで、遠山には猶白皚々たる殘んの雪を見る、木の芽はる雨はふゝきにまじり、香ぐはしき梅も人來の鳥を宿すに至らず、老少はまだ寒氣に得堪えずして籠り勝の多かる時、既に彈絲妙音を以て讀者諸君に見えしめたる光子の孃は、晝食をゑて、又例のおのが居城——六疊間の二階にありて、さし入る窓の日蔭に身を烘り、室咲の梅と顔打ち見合せ、互みがはりに笑を含みて香を競ふ。一は無心にして笑ひ、一は有心にして笑ぬ、同じくこき破蕾の時、有心のもの果して何の爲に笑へる。暫くして光子は笑顔を繕ひて形を正せり、兩靨痕消えて自ら温威を示す。今光子が笑を繕へる心の中を、作者が物數寄にも化學的の分析を試むれば、

アーこの次の日曜には餘程耻かしからう。併し誰がまア妾を幹事に撰んだらう、それにあの人が男の方の幹事でなければ何にも耻かしいことはないんだが。今日もこの通り手紙をお遣しなすツて、會のことに就いて色々と……終の方に深切な…………そりアあの人ならば……けれども今迄幾度かお母樣にことわツて仕舞ツたのに、今更になツてあの人ならばと……マア實に耻かしいは……次の日曜…………

一圖に思ひをこめて胸をもしり火に心を焦すは、通常女子の情なり、一圖に思ひとこむ、故に他のことは念頭に上らず、他のことは念頭にのぼらず、故に思慮其の事と適合せず、今や光子の胸中たゞ「アノ人」の外なし、「アノ」人に思ひを集めて、兩の手はつゝみて懷に入れ、首はうなだれて半ば襟の裡にあり、胸打ちこがす煙の中には、彷彿人の形を現し、見詰めたる眼邊には、迷離去らざる影あらん。折しも後の襖を明けて、光やと呼びて入り來るものあり。驚きて顧みれば、わが母なる人なりけり。母なる人は打通りさま、

「オヽ、二階の暖いことよ。」

獨語つゝ、つと光子の横に坐をしめたり。

母「光や、こんなことをいふと、お前は又かとお云ひかも知らないが、昨夕もお父樣と相談したが、お前も最う年頃だし、それに今迄一軒や二軒なら宜いが……さうは辭り惡い譯。今迄申越た内に私とお父樣の眼で見て、此處ならと思ふのもあるし。あんまりお前の樣にまだ早いとばかり云ツて人の云ふことを聞かないと、仕舞には誰も相手にする者はありません。だから私等二人に任して置いて、相應の者があツたら……イヘ隨分ありますからさ。早く私等に安心をさせた方が宜うございませう。お前兄樣を御覽、丁度一昨歲の秋、お父樣の云ふことを聞いて、今では兒供も出來て、兩人とも孫の顏まで見

く大きに安心をしました。今でハお前のことばかりが心に……お前だツてドウセ一度ハ……。」

おもひを一ツに集めて、胸火を燃やすをりしも母のこの言葉、顔さへ打あからめて恥らふも理りなり。とつおいつ右左に思案をめぐらせど、さりとて却ツて心緒を亂すのみ。斯る折のいひぐさとてハ、女子にハ至難の事なるべし。稍ありて光子ハ、

光「お母様、妾や此間申上た通りですよ。あんまり我儘すぎる様ですが……矢張……あの此間の外に何處からも……無いのでせう。」

母「だツてお前、此間の外ツてあれで幾軒めです。好いとも惡いとも言ハないで、唯辭ツておくれでハ、妾だツてお父様だツて困らうぢやないか。彼の人ハ如此いう所が否、此の人ハあの處が好かない、とか何とか云ふならまだだけれども……………一体お前ハ何樣いふのが好いのですか。」

光「アラお母さんいやですよ、妾ハ擇りきらひをするでも何でもありませんやね、唯まアだ……何にもさう急がせなくても好いぢやありませんか。」

母「又始まりました、亀の甲より年の功でも、年寄のいふことハ惡いことハありません。」

母ハをこしく急きてきたれど、もとこれ我が娘を愛するの餘りに出でたることなれ

ば、さ程にそば〱しうもいひつのらむ。

母「いかにもお前の譯の判らぬには困ります、とツくりとよく考へてごらん。」

右の一語をこの場の捨臺詞として立ち去りたり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

山本靜は今日も彼の紳士淑女の集會の第二回を畢へて、午後第十時頃宅に歸りぬ。這般おのが幹事の地位に立ち、集議の上會名をも國風會と名付け、充分周旋の勞を盡し、前會には增したる盛會ぞとて、いつになく喜びの色を現はし、日頃かたきの如く罵りこちを妹豐子にさへ、物言ひざまやさしきは、これぞ故あることなるべき。羽織袴打ち解きて、くつろぎ居る傍ら妹は之を疊みながら、

妹「兄さん、今日はお母様がお風邪氣で、一日お臥みなすツて居らツしやいますよ。」

兄「ナニお臥みだと……大したことは無いだらう……お食事は……。」

妹「お湯漬をお晝に少し召し上りましたが、お晩餐は少しも召し上りません。」

靜はこの語を耳に入れしか、入らざるらう、唯豐子の顏を打守りて、遮に笑顏を作り、將に舌頭にまで上らんとする音聲を、上下の兩唇にて抱き留め、胸の内にてひとり物語をなん

むじめぬる。

宮島も實に物數寄ぢやないか、過般報酬のかはりに今日は僕の地位に立ツて呉れろと云ふから、何事ぞ、ハヽアと思ひ付いたことが有ツたが、其れとはまるで違ツて、イヤハヤ何さるとだらう、妹を呉れろとは、實に譯の判らぬ奴だな。學問だツて仕事だツて、別に教師につかせたことはなし、遊藝が、ツたことは母が少し琴を教へたばかり、それにまアまるで子供を。ドウして、何處に見處があツて……今年漸く十四ぢやないか、ろりやー呉れるなア雜作もないが……熱心に冀望するなら猶おかしいや。兎に角あきれさ。この次の會には一所につれて來いと　　アハヽヽヽヽ。」

妹「あれ兄様、驚駭しましたね、突然に笑ひなすツて。」

母の寝所にありといふが、さすがに氣にかゝれば、母を見舞ひ今日の容躰をも聞き、猶彼此と慰藉して、靜ゐれのが居間なる寝所なぞ入りたる。こたびは傍に妹も居らざれば、引き被ぎたる夜具の襟元より低聲に音たて、

まづ〳〵今度こそしツかりと——たしかに目的を達し得たといふても宜しい、今日の擧動、彼の仕業に於ては最う充分だ。　女だゞな恥しさうな……彼の愛嬌といひ……今迄五六ケ所より申込みがあツても、皆ンな斷ツたと……ウン誰も欲しがるのは無

理はない……アーもう……大丈夫……アー眠む……愛……無理……女……
如何なる夢をか結びけん。
いつになく朝まだき起きいでゝ、役所へ出づる支度をなしければ、妹は進まぬ顔に出で来り、
妹「兄様、母様がどうも……あのお医者様を呼びに遣りませうか。」
兄はこの言葉をきゝて直に母の所にいたり、容子を見るに、昨夜とはうツて変りし容体、物いふ声さへに霜夜の虫、いとゞよわりえて、つく呼吸さへに肩より出てゝ苦しげなり。この有状を見るや、大に驚き妹をかへりみて、
兄「なせ早くさう云てなかツたのだ、この大馬鹿め。」
母に向ひて、
兄「お母様、昨夜より少しおわるい御様子でございます。唯今直ぐに医者を迎へにやりますよ。」

批評

○「こども」第十二號を讀む

伯耆　ケー、エム、稿

此頃東京教育社發行の「こども」第十二号を得て一讀したるに、成程面白き雜誌なり、小學生徒などには隨分適當ならん、と云ふて賞贊すると同時に、一二の所見を陳べて、聊か記者の注意を乞ひたきものあり。即ち無遠慮にも左に、

一　誤字の多きこと。假名文字の誤りは一々擧ぐるに暇あらざれば略す。「たま」欄内、「善い子」と題する文中に、英語の school を sehool とし、book を pook としたるが如きは、最も能く目立つものなり。記者も定めて御多忙に入らせらるゝなれど、今少し御注意ありては如何に。

一　圖畫に意を用ゐざること。「かゞみ」欄内「鈴鹿の物語り」の畫は如何、該號を讀みたるものは先づ此畫の奇怪なるに着目否喫驚したるならん。萬吉の畫像は古書に載するところでは大抵頭髮を削り、頭の二三局部にケシを殘したるものなり。該号に載せるものは恰も今日のザンギリ坊主の頭と少しも異ならず、これ萬吉の家が赤貧にして髮を削るの資力なきによるとの妄想より出でしものか、たゞしは何か據處ありや。其荷擔せる前の方のものは何物なりや、今日用ふるカバンの類にはあらざるか、當時にては之れを何と稱せしや。　又其傍にある大人の頭に戴きたるものは何物ぞ、早く云は

ヾラツコの帽といふ風あり、當時此類のかぶりものを用ゐしにや。又手に携へしは蝙蝠傘にはあらざるか、正しく蝙蝠傘なるべし、これ天明年間のことにて、今より百余年以前のことなり、當時蝙蝠傘の吾邦に傳来し居たりしにや、サツパリ譯がわからぬ。聞かまほし。

一　文章に意を用ゐざること。　往々在地方の小學生徒などにて、容易に解し難き東京方言のあるは如何と思はる。又これ奇しと思はるゝは、十ページ五行「……僅三四錢づゝの錢を得て……」とあるこれなり。　當時の通幣は今日の一錢二錢の貨幣をいは全く異なること明かなり、思ふに從来の文章家が得數錢云云と書きたるを、速飲込にも今日の貨幣と取り誤り、斯く書きしならんか。　文章家の所謂錢とは一文二文と稱せる文のことなるべし。若し此誤謬なりとして記者が今日の兒童に便するの意より出で、斯くなせしなりとせんか、升は不都合のことどもなり。トハ云ふものゝ、當時此名稱を有する通幣のありしにや、偏に記者の高教を乞ふ。　又十五ページ三行に、「帽子のことを hat ハツトと申します」と記せり。　帽子と云へば一口に云はるれど、其種類は一ならず、hat cap は通例なり、bonnet の如きも一の帽子といふて不可なし、此等も併せて記載せられては如何。若し「ソハ百も承知、二百も合點なれど、餘り高尚に渉るから」と

云はれんか、然らば何故 hat は云々の形を有する帽子なりと云はざる、cap 等の帽子も一括して hat の範圍内に投入せらるゝが如きは如何ん。

終りに臨みて一言記者に切望を、「こども」の編輯上に今一層の注意を與へられんことを。幸に余が言の不敬に渉るを咎むる勿れ。

附言、余は第十三號以下を讀まざれば後號に於て正誤せられしや否、之れを知るに由なし、若し之れあらば幸ひ恕せよ。

○慨世義膽爽壞の譽（北海散士著東京本町金港堂發行）

これはまだ前編だけ出たものですから、総躰の結構については評しかねます。が、著者は嘗て五年間も北海に居られたといふだけありて、能く彼の北海土人の風俗狀態を寫してあります。そのうへ熟ら其の地の現象を實見して感慨已みがたく、此乃著を公にせられたる所も見えます。又鐵窓の慘月、草廬の悲風など、まづ可成な寫し方です。とはいふもの〻、其の文章は如何かといひてや、誠に返答に差問えます、遠慮なく答へれば、ノンセンス！

夜と朝　東京神田小川町速記法研究會發行
百千鳥　大坂心齋橋北詰好吟會發行
學林　神田區西小川町獨逸協會發行
婦人世界　京都油小路上令徳會發行
文園　本郷區上富士前町文園社發行
京華春報　京橋區南槙町京春社發行

リツトンの小說の一種輕快の文章で、妙に人情を穿ッて居るのはいふまでもありません。斯の夜と朝は其の傑作なる Night and morning. を、益田克徳氏が其の老父母の膝下で講演したのを、有名なる速記者、若林玵藏氏が速記せられたもので、十二冊完結の目的で、此の度其の第一冊を公にしたのです。能く／＼原書と引合せて讀んで見ると、蝉の脱けがらの誹りは到底免かれません、解りにくゝないだけが取り處かと思はれます。○百千鳥は先づ一口に小說雜誌と申して宜しうございます、總じてあまり感服する價値はございませんが、紅葉山人、宇田川文海などの手に成りたるものなど、隨分見られるものもなくもございません。が、東京の都の花などの上に駕して、鳴き立てる譯には到底まゐりますまい。○婦人世界は我が國固有の美徳は愈々增々之を進め、加ふるに歐米の長所を取り、して永遠に賢固の基礎を設け、立派なる婦人の住處とするとの目的で現れれました。○文園は將に將來になすあらんとする若干の腕揃の結合から出る學術雜誌で、吾人は此の頃其の十一號を讀みました。隨分老成の議論もあり、活潑なる文章

もあり、快活なる詩歌もありませ。唯島渡目に立ちましたのは、高橋作衛氏のストレンチ氏を祭る文、高橋藏山氏の古莊嘉門氏を送る詩。何れもストレンチ君古莊君とありますが、何故に先生と書かないのではか、洋文なら兎に角、已に日本人漢文でかく以上は。日本文漢文で、後進の士先進の士に對して、特に其の業を受けたる先進の士に對して、君とかく例はありません。あるなしに係はらず、奥床しくありません。○學林は獨逸學協會雜誌を改良したる者で、政治、法律、經濟、財政、文學、理科、工藝、醫學、統計等の學術に關する事項を記載するさうです。斯の學を研究するものには極めて有益なものでせう。が、批評の一欄だけはあまり感服が出來ません。○刻翠剪紅の彩筆を以て、都門の繁榮を寫し、流麗洒落の妙文を以て、世俗の狀態を記し、政事の得失、社交の利弊を評論するに至ては、或は譬喩、或は寓言、或は諧謔、或は滑稽を以てし、諫諷矯規を隱約微妙の間に存せしむ、是れ我京春華報の一大新面目あり、と絶叫して現はれ出でましたのは京春社の京華春報です。いかさま其のにほひはあります。が、第二の東京新誌とならざる樣、熱心に冀望いたします。

母(はゝ)のつとめ

（半紙本二冊親の巻三十八葉子の巻五十八葉　定價七十五錢秀英舍印刷）

此書は友人にて、醫科大學卒業受驗生なる三島通良君の、編著に係り、榎本子爵の題言、醫科大學教授濱田玄達君、同講師弘田長君の校閲、且ツ序文あり、世に出でゝより新聞雜誌の好評あり、余が是批評は、固と僭越なるべきかと、躊躇せしなれども、編者の囑頼りなるを以て、玆に意見を吐露すること、はなりぬ、

泡の風流士

題名　此書の題名によれば、母親の職務といふをにて、中々意義廣くて、天地に瀰漫する樣に覺ゆ、然れども記せる所を見れば、親の巻には懷妊の事、其間養生の事、出産産蓐の事、子の巻には人乳母、乳人工、滋養養生法、生齒后の手當、種痘看病及學年迄の母の務をものしなしたり、乃ち大概は母親自身の懷妊、産蓐中の心得、兒体養育法にして、我醫學上より觀察を下せし者なり、思ふに母親の職行は、自らの懷妊よりして其小兒學齡迄の注意に止まらざるべく、主として國家に對し、庭訓上の教育にあるべきを信ぜざるなり、又之を世人に唱導するは、大必用と考ふるなり、然るに此一條に關しては、僅か數葉に省略せられしは、遺憾の事共なり、大凡婦人は、其懷妊に授乳等の衞生生理に就き、其梗概を知らざるべからざるは論を俟たず、而して小兒の攝生を以て、母の務とのみいふべからず、精神上の德育、智育を涵養せるも、其大職分なるを玆に

は記さず、思ふに題名は、其全篇を代標する者なれば、香月牛山が、小兒養育艸と名ツくたる如く、淡泊な慈母の心得とか、婦人衛生艸といふて同じ圪なり、

主義　書は骨子なかるべからず、一篇其主義を欠く可からず、此書の主義となし、骨子となす所は、元とより神聖なる實驗學術的なるべく、實驗と自然より歸納して、眞理を演繹すべく、言を高尚に假るも卑俗に假るも、決して曖昧鬼神に託すべからず、此書は宗教的の分子を見るなるを、敢て非難するにはあらねども「緒言の條は養み育て、教へ導くは、又婦人の義務にて、神已に之を定め給へりといひ、精神保養の條下に「我等の行末は神の冥助の在るものなりと信じて云々とあり、

文章　緒言の冒頭は、貫之が古今の序文より脱化し来たる者にて、中々面白し、全篇は無缺金玉とこそ聞えけれ、いかにも春蠶の絲を吐く如く流暢なるものせられたり、蓋し緒言は難し、唐詩撰の緒言さへ、服南郭は數十篇改竄せりと聞く、而して此緒言は和文軌範中に入り度き容貌あり、

凡例に「殊更に談話体を學び可及的學術語は換ふるに普通語とせりと」いふ如く里耳に入る樣にか、れ、處々諧謔を用ゐられたるは、一段の興味あり、併し此諧語は切角の名文をして、一寸品格を下落せしむる傾きある樣に見受けらるれど、彼の「農のれ

噂ななどは例令懷妊の中にても家に居ッては機も織り候賃仕事或は野に出ては夏の炎天に背を曝して田の草を取り畔に流る、清水に麥飯に行厨を開ては百味の御食の心持にて食べ又は秋の日影を恐みて云々」又「産屋には家の内で尤も善い座席を用ゐねばなりませぬ其所は夏は簷端に薫る橘花、垣に匂ふ溲疏花を見ながら風鈴に涼風を受け冬は又硝子隔て、松の落葉敷並べたる庭に雪の頃なからはや匂ひ初る梅の蕾と詠め云々」抔いふ如く詩人的の文字を以て詩思を點綴せられしは、文格をして修辭學上の自然に適せしめたるなり、殊に婦人をして、再三の讀過を餘儀なくせしむるの興味は、精神保養の一條にて、乳房用意に一條も亦た熟讀すべき者なり、腹もへコント減るとか、ヒヨコ〳〵生れるとか、グツスリ睡るとか、形容の俗語用ゐて妙なり、

事實　殊に事實に富み、又尤も勞力を見る處は、乳汁の篇なり、之に次て、尤も着實の筆力あるに、分娩より初めて歯の生ずる迄、及歯生后の養育法の二章なり、小兒動作の表、智識發達の表は、慈母は參考に供して面白からむ、唯々事實の不足と覺ゆるは、種産后母の心得なり、之を世上の母に報道するは大に肝要なりと信ず、其他外方の遊戯と小兒誘導法に就き、猶一層の文章を得たく、且ツ事實上徳育、智育上頗る不足を感

されバ、獨り衛生に止まらずして、心理學上に歸納して詳細な母の職務を記述せられんことを願ふなり、

今日社會の母に熱望する所ハ一に其職務を盡されんことにあり、体育を先にし、智育なり德育なり、母親が在來の迷信を打破して、學理の精神を與へ、其懷妊產褥中、在來の輕躁を戒愼しく、衛生の思慮を附する事是なり、然り而して國家の爲に完全なる子孫を養成すること是なり、嗚呼子孫繩に兮豈に慈親の務ならずや、三島君の勞力と目的と、一に茲に在るなり、社會の慈親よ、一讀百服膺以て其勞に酬ゆべし、

雜録

關根正直氏ハいたく我が文明之母を贊成せられ、特別な寄稿あるべきを約せられたりしが、今回ハ何分にも多忙中にて起草の暇なければとて、唯左の譯文を送られぬ。赤染衛門の話に就きてハ既に本誌第十一號に衛遠樓主人の手に成るものあり。而して今其の重複するを顧みず、又茲に掲ぐる所以のものハ、是れ一にハ同氏の厚意を空ふせず、一にハ本誌特別贊

成の一班を表し、且其の譯文の流暢にして、和文の摸範となるべきを以てなり。讀者請ふ、尚續々金玉の我が紙上に現はるゝを待て。編者誌。

○赤染衛門の傳 大日本史列傳漢文和譯

關根正直

大隅守時用が女に、赤染衛門といふ女房ありけり。始め御堂殿(關白道長公)のうへ(北の方倫子)に候らひけるが、後に大江匡衡が妻となれり。心ばへいみじうて、和歌のかたにもすぐれたるは、和泉式部と一つなみにぞいはれける。其の頃於中納言に、藤原の公任卿と申すおはしけり。いかなる事にてか、公家をなぞかんとて聞えたる儒者、紀の齊名大江の以言に、じそ(辭表)を、せたりけるが、心にかなはぬ處ありとて、更に匡衡にあつらへぬ。匡衡うれへ思ふやう、齊名以言などが、並びなきざえにてさへ、此の卿をあかせざんなるを、己れがいかでと、思ひ屈して居り。衛門さる事をもしらで、なぞかくはと、氣色とれば、かう〳〵なんといふ。衛門もなべし打傾きつるが、思ひ出で、いふやう、彼の卿は、いみじう心驕りしたまふ本性なれば、先づ根ざしやごとなき由をいひて、さてつかさ位の、すこしつきなきふしを、かこめたらましかばとなむ、進めたる。匡衡げにとて、其の心ならひして書きたりければ、公任卿も、いたうめで悦びけりとか。されば、心ちゝたるためしには、これをなん語りける。これが女を、江侍從といふ、それも和

歌の上手なりとぞ。

○母の稱呼

鷲陵迂人　山下重民稿

はゝ、子より女親を稱するの辭にして、皇國一般の通語なり、和訓栞等其明解あるを見ず。重民按ずるに、皇國言語の靈妙なる、口の開闔發音の緩急によりて、其意義を示すこと常なりはは五十音中の第一段中に位し、唇音商聲にして、開き生ずるの意義を含めり、故にはら（腹）はり（張）はらむ（孕）はじめ（初）はな（花）はなる（放）等の連語を生ぜ、且つはつといひはーあといふ如き、應諾の聲あるによりて見れば、受々身即ち女性にして、母たるの義明なりといふべし。はゝとは連呼したるまでにて、猶ほちゝといふ語法と同じ。

漢土の母字は、六書中所謂象形文字なり、說文には从レ母象ニ懷子形ー一曰象ニ乳形ーとあり、證とすべし。又何によりてぼといふ音を附せしやといふに、增韻に母者慕也、嬰兒所レ慕やとあれば、慕といふ義より、ぼの音を附せしものと知られたり。

おも、

東雅云、日本紀舊事記等に、母の字を讀てオモといひたり、百濟の方言にも、母をオモといひたり、今も朝鮮の俗母をオモといひけるは古の遺言也、我國の語彼國に傳へしか、又彼國の語の我國に傳りしか、詳ならず。

和訓栞云、日本紀に母をよめり、古事記に御母とも見ゆ、乳母湯母なども見えたり、今朝鮮にもしかいへり、一說には梵語の阿摩也といへり、(重民按ずるに、阿摩は女といふ義にて、母にあらず、別に說くべし。)万葉集に、阿母と書たり、史記の注に阿母は乳母也と見えたり、万葉集に乳母をもよめり。

いろは

狩谷棭齋が、和名類聚抄箋注に云、母訓ニ以路波一、見ニ神代紀一、其他尚多、按以路波謂ニ生母一也、以路是親昵之義、波即波波之急呼、以別ニ嫡母庶母繼母之稱一、猶下同母兄弟姉妹、稱ニ以路祢、以路登、以路勢、以路毛一、以別ニ異母兄弟姉妹上也、汎訓ニ母字一曰ニ以路波一、非レ是。

和訓栞云、母の古語なり、神代紀和名抄にみゆ、色身は母より受れは、色幹の義なるべし、實母をいふ詞なり、色をいろはといふおと、万葉集に見えたり、母をいろとのみよみたれば、色も本同義なるべし。

重民按ずるに、椒齋の説當れり。以路の親昵なる義は、今俗間に交情親密なるを、いろといふにても知るべし、是等は古言の遺れるなり。

たらちねのえ、

源義亮が、いそのかみに云、万葉集三帶乳根乃乳命者云々、同十一足常母養子云々このたらちねといふは、古事記詔何爲日足奉、答曰、取御母、定大湯坐若湯坐宜日足奉云々。赤子を育ふに、月日を足しめ、成人は母のわざなり。因て日足根母の日を省きたるなり、後世に母をたらちめ、父をたらちをといふとかや、ふるきふみに見えず。たらちねの親とは、新撰万葉の頃にいへりと聞ゆれど、古はなし。

おや、

和訓栞云、古事記に母の事を祖とも書けり。母はをやとよみしは、万葉集に見えざり、伊勢物語真名本に、母字おやとよめれど、必え、とよむべし、されど万葉集には母を多くおやとよめり。我國の風俗親の内、多く母に就は、親しみをうしとされはなり。

れみなおや

大和物語中巻云、まかきとたふ、女おやはうせ給ひけり、云々、冠注云、葵巻云、たゞ女おやなき子をおきたらんこゝちしく云々、枕艸紙おぼつかなきもの、條云、十二年

の山でもりの法師の、女おや云々とあり、其稱のふるきを知るへし。

かゝ

俗に、母をいふ。かとえと音通はず。

木煥卿が撈海一得に云、今小兒母をかゝさまと云、是は家家の字なり。通鑑陳の宣帝記に曰く、北齋後主泣啓ニ大后一曰、有レ緣從見ニ家家一、無レ緣永別、胡三省注に、齋諸王呼ニ嫡母一爲ニ家家一と、いつのころより日本に言傳へたるにや、子が母をかゝと呼ぶより、轉じて父も妻をかかと云。

重民按ずるに、我國にてかゝと呼ぶは、前に云ひし如く、えとかと通音なるに由る者にして、通鑑より出たるにあらで、偶然暗合せるのみ。而して方今稱する所の者は、左の數種なり。

おかゝさま　華族多く此語を用ふ。

おかーさむ

おつかさむ　士族以下此語を用ふる者最多し

かーさむ

かゝさむ

おつかー。。。　市街裏店住の者之を用ふ。

（未　完）

○半老にして情を解す

徐震が美人譜に云く、美人艶なる處十三歳より以て二十三に至る、たゞ十年の顔色あり、譬へば花の初めて放くが如く、芳菲妖娟全く此の際に在り、之れを過ぐれば花の盛開の如く、爛熳ならざるに非らず、而れども零謝之れに從ふ、然して世また半老の佳人を羨慕する者あり、其の情趣を解領するを以て固より愛す可きありと。我も是の如く聞く、楚々人を動かすの秘鑰は、全く成熟せる美麗にありと。乃ち西史を假りて證となす

十年間多來戰爭を釀せし巴利公子が奪ひたるヘレナ妃は、其の年紀四十歳以上なりき。

亞西玻は雅典の統領比哩吉に嫁したるは三十六歳のときなり、四十歳を超え非常に美を増したり。

クレヲパトラは三十歳を超えてアントニユース心を奪ひ、リウイアは三十三歳に

して羅馬帝アウグストス專房の寵を增し、

ポアチエのヂアナ夫人は四十八歳のときに於いて、當時二十九歳の佛王顯理第二世と最激の戀愛を結び、

佛王路易第十三世の皇后安那は、歳三十八にして全歐美人第一と稱せられ、時の宰相里攝流およびバツキンハムが競爭を釀し、

ニノンドレンクロスは七十二歳にして人を動かすの容姿を以て其の名を轟かし、

ビアンカカゲロは三十八歳を超えて伊太利の公族フランセスコメヂシの妃となり、

佛王路易第十四世は、四十三歳のメインテノン侯公主と娶り、其の他有名なる美人處女マルスおよび夫人レカミイールは、四十歳を超えて其の美の頂上を極えたり、

といふ。好事家よろしく之れの例を東洋に求めよ。

○美とは何ぞ

咽烟山人

歐羅巴にては齒の白きを喜べども、印度にては奇麗なる齒と云へば赤色あるをよし

とを、淡紅色の顔は最も人好のする者なるは人々の許す所なれども、グローンランドの婦人は藍色又は青色にて顔を飾る。露國の婦人に至りては白粉を塗りて粧はざれば痛く見醜かるべし。扨て其次に鼻は形は如何なる者を以て最乘とするかと問はゞ、少しく返答に躊躇せざるは稀なり。ペルシヤにては曲り鼻を好み、ハイチー島にては押し付けたるが如きを喜ぶ、若し子を生む者あるときは即ち其子の鼻を惜氣もなく押しひしやぐ風俗なり。露國にては尖鼻を尊び獨逸人は鼻柱の通りて細く高きを好み、土耳其人は太くたくましきを好めり。獨逸人は細面にて卵形なる顔だちを愛すれども土耳其人は世に所謂圓形顔なると愛す。獨逸人は前額の突き出で、高きは怜悧なる記號なりと言へど、希臘國にては低き額を以て美の眞髓とせり歐洲文明國なくは黄金色、鳶色、黒色の髮毛を賞すれ共、マリアン子ン島にては純白なる髮毛を最上とす。ペルシヤ人は赤毛を嫌ひ、土耳其人は却て赤毛を尊ぶと神の如し。口は小なるは何國に至りても等く賞はる所なり。』十人十色とは此事なるべし、世間幾多の美婦醜婦、みだりに美を誇る勿れ、みだりに醜を患る勿れ。

○餘興　　咽烟山人

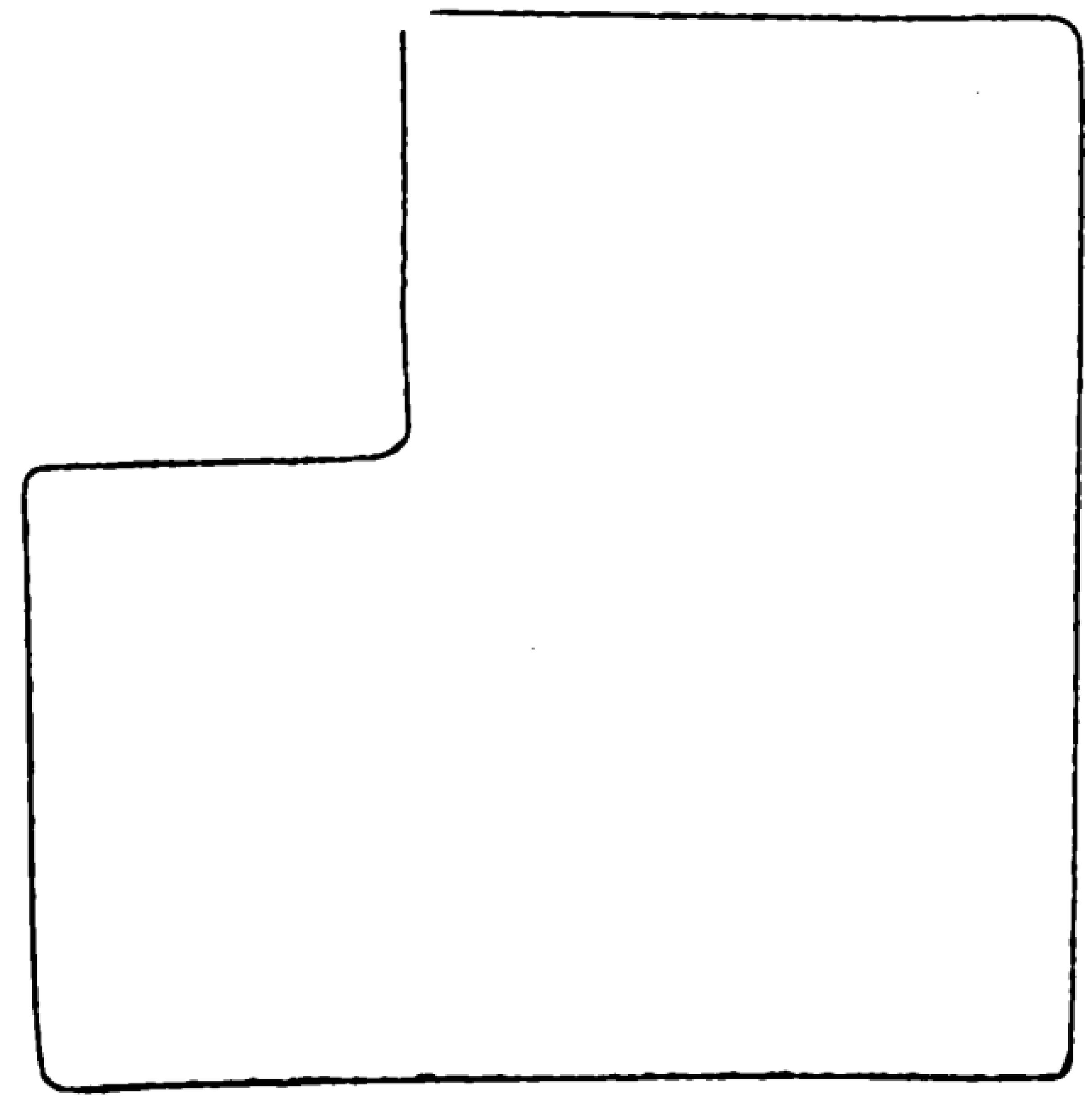
○新奇な拂方。　或商店の主人雇人に向ひて、ドーモお氣の毒だね給金を渡すのが遲くれて……ダが貴公も知ツてるだろうが、時ハ金だと言ふから、ナンナラ、モー四週間も待てもらひたいね。

○私はいや。　おやぢせがれに向い、コレ萬吉、おまいは醫者にならんかエ。わたしはいやです。何故否だ。ソレデモわたしは虫一疋殺すことも嫌ひですものを。

○自殺は法律の問ふところでない。　老年の夫人（此夫人若かりしとき余り美しき方でもなかりしと思はれる）が、宴會の席にて世間話の時、「わたしは顏容の惡い子は大嫌いですよ。側に底意地の惡そうな裁判官とも見へる若紳士、「ヘーキットですか。キツトですともホントに私は器量の惡い子はみんな殺して仕舞たいんですよ。若紳士は微笑しながら、左様自殺は別段法律の問ふ所ではありませんからネ。

○うまくあてたり。　小學校にて試驗の時、教師は一人の生徒に、冷血動物の一を擧げよ、と問ふあるに、生徒は即座に答へて、氷熊ッ。

○新考物。左の新考物は、福島縣大八木氏より寄せられたるものです。かやうなるものが都て三種あるのですが、第一だけ出して、あとは追々に出すことゝしませう。



四角なるもの、隅と

四角に切取りたる形

右のものを、二た鋏(はさみ)で四角にするには、如何したら宜しうございます？

○前號の解答。

湯屋の休業札。

當ツた人が二十四人でございました。典物(しちもの)と答へられた方もございましたが、至極御尤もと存じ、同じく雑誌を一部呈上します。

彙報

○嗚呼今日！

嗚呼今日！　今日は我が日本人民が最芽出度き日なりとて祝し奉る天長節の佳辰なり。加ふるに叡聖文武にわたらせらるゝ明宮殿下の東宮に立たせたまふ最とも有難き佳日也。加ふるに我が文明之母も着々歩を進め来りしにも拘はらず、更に一歩を進むるの紀日なり。嗚呼今日！　明治二十二年の今日！　九重の雲は如何なる瑞をや呈すらん、千門萬門に飄る日の丸の旗は、旭日に映じて特に麗らかなり、我が文明之母の扁額も常に増して光あり。

○菊花

菊兮霜下傑、馥郁殿ニ群芳一、陶令果何取、取他晩節香。日本人民よ、大和民族よ、此の菊をかざして君が世の千代を壽け。此の菊を看てれの魂膽を形造れ——君の爲めに、日出る國の爲に。

○小楠公の社殿

を四條畷なる公の墓畔に建立せんとの計畫あるは、既に讀者の知る所なるべきが、其の工事も今は地ならしより、石垣築立てまで運びたる由。吾人は一日も早く落成せんことを望む、可成立派に成就せんことを願ふ。記し終ツて思ひを口に上るものは、元永孚氏が小楠公の詩あり。

尊氏肉可レ食、眞義骨可レ摧、誓述乃父志、直挽ニ皇運ニ一回、義旗一動天地震、北敵畏レ之如ニ迅雷一、今日斬ニ一敵一、明日斬ニ一賊一、陰雲漠々天黯黒、嘗獻ニ一詞一斥ニ宮姫一、頗似

諸葛擇醜妻、淵腔子唯忠義心、外物一點不レ能レ移、天泣天顔拜別日、鬼哭先廟題辭時、嗚呼忠孝兩全自レ古少、公是萬世臣子師。

○和氣清麿の肖像

今度日本銀行より發行する新兌換銀券の圖案は、一圓が武内宿禰、五圓が菅原道真、十圓が和氣清麿にして、目下大藏省印刷局の御雇彫刻師キヨソ子氏が擔當にて、六ヶ月間の研究の上、漸く武内と菅原の兩肖像は出來せしも、清麿の像は何分にも參考となるべきもの見當らざれば、京坂地方にて頻りに探鑿を盡されて居しが、此程京都にて一葉の肖像を得たれば、それに從ッて彫刻に取懸られしといふ。出來せば、美術家の參考となるべきこと隨分多かるべし。

○裸美人

吾人は前號に於て裸体畫美人論一篇を掲げたり、而して其の中風數上よりも一瞥を放ッて之を非難せり。而して頃日教育週報記者の裸胡蝶の影響と題して、左の如くに記したるを見る。

或る雜誌に一たび裸胡蝶の怪畫を掲げて、自分勝手に「美」の宗義を下し、世の謂はゆる御利口連を瞞着せしより以來、射利に鋭き我利々々者流は、好き口實を得たりけり。正しく其の影響ならん。近來坊間の繪草紙屋に、見るに得堪へぬ怪畫の陸續として顯はれ出づるは、果して風敎を害るの恐れなきか。老人は之を見て眉を顰め、君子は之を見て嘔吐を致も、學校歸りの少年女子は、將た如何なる感想を以て之を眺めん。願くは其の筋の嚴命により、犇々と禁制したきものゝ。嗚呼之が備を作りし者は抑も誰ぞや。

然り、眞に然り、犇々と禁制ありたきものなり。

○何ぞや

舫ひきれたる捨てられ小舟。
もてられとぶね。
あちらへ揺られてはくらり、
こちらへ揺られてはくらり、
てもさてもいかなればわれ。

身をうきくさのねをたえて。
夕汐みてば岸にそひ、
朝風さてば浪にそひ、
あな口をしの世のありさま、
なう船人こなやこげや、
よしあしの葉の角芽搔わけ。
うもめとともにいざ水上へ。
漕で武陵の春ならねども。
心の綾瀬ねふもひらくと。
秦をのがれし人にも逢ふて。
ひとにも逢ふく
問はな昔のこゝの渡りに、
その業平の歌よみし風情、

此作者は自ら校書なりと申す。或人曰く、美妙齋の作より餘程面白しと、或人曰く、定めて代筆ならんと。吾人は曰く、兎に角此位に出來るなら、人間視せられざる職業を營まずとも、外に仕事にいくらもあるべきに、何ぞや。

○悲むべきかな

唐物屋の娘、それでトームスか、何だ人を愚にして、と知らぬ方は仰やるだらうが、なにしろ本郷通りで、トームス令孃といへば書生仲間に名を知らせた美人、今年十七の愛敬盛り、笑窪に湛ふる戀の根本、其の愛嬌の水を一ミニユト、ニミニユト宛おまけに添へて賣れば、イーグル銘筆が一ダース、三十錢でも四十錢でも、ドシ〳〵捌くるといふ程のさわぎ。されば其笑窪の傍に、「一此中へ身を投ぐべからず」と制札を立て、世間の男に示さなければなるまい、と或宗教家が首を傾けをりしとのことなるに、老少不常は是非もなし、昨日病氣にて卒に死亡したることそえかなくれ。是に於ていまだ遂げざる戀といふ小說が、近々の内何れのところよりか出でる由と、昨月十二日の讀

賣新聞に見えたりしが、吾人は其の死をかなしまず、實に斯の如き婦人ありしやを悲む。

○讀了ッて憮然

燃えたつばかり　緋縮緬の半掛、フサ〲とかけし大島田髷を真向に戴き、一輪大菊の花簪に、鼈甲の櫛笄を挿し、かざし、紺と淺黄の大瀧縞、ものは定かに分らねど、何でも綿綴威の三枚がさね同じ物の羽織を一着に及び、緋メレンス菫紫の長襦袢を、ひらり〲とひらめかし、一昨十四日午前東京府廳に罷り出でしは、年の頃やゝ四十路に近き老美人、へゲ落ちるまで紅粉塗上げた顔ふり立て、地所分割の件に付き、滔々懸河の勇辯を奮ッて、係官に所分の斷行を請求なせしも、捗々しき挨拶無りしより、一層激して最後に、書記官の銀林さんか、渡邉さんに御意得さしと強情張ッて居られしは、近頃の見物なりしと、抑も此老美人といふは何者ぞ、知る人は既によく識る、淺草區猿若町の公民の資格を有する女代言師、と是亦讀賣新聞昨月十九日の紙上に見えたるものなるが、讀み了ッて吾人は憮然たらざるを得ず。

○狂花

此頃ちらほらと狂花あちこちに見ゆるが、是れ何人の目にもイヤに見ゆるなるべし。婦人の狂花も時として吾人の目に觸るゝなるが、一層見よくきを覺ゆ。

○東京音樂校

は生徒も追々増加し、且つ益々其の規摸を擴張する見込なるとを以て、今度愈々之を東京美術學校の隣地に新築すること、なりたり。木造二階家二百二十五坪の建築製圖も既に出來し。去る十四日工事の入札ありし由。

○成立學舍女子部

神田區駿河臺なる同部にては、昨月下旬學期試驗結了の都合にて、高等科、本科、幼年科へ入學を許せし由。而して今春第一回の本科卒業生八十二名ありしが、此度は廿四名の本科卒業生を出すに至れり、以て同部の日増に隆昌

に赴くを知るべし。尤も卒業證書授與式は、來春まで延期し、紀年會と同時に擧行するといふ。

○共立女子職業學校の外塾

は是まで神田錦町三丁目五番地に在りしが、其の生徒追々增加し、今は狹隘を告ぐるに及びしかば「今回麴町區飯田町一丁目二番地に移轉せりといふ。

○鹿兒島女學校設立の計畫

鹿兒島にては今度一の女學校を設立せんとの計畫ありて、米國より女教師二名招聘の議も既に定まり、在大坂の故種田少將の未亡人も特に之を賛成せらる、由なるが、在京貴婦人の賛助を得んとて、先頃縣會議員なる竹崎一二氏は上京したりといふ。

○大日本婦人俱樂部

芝私立女子中學校々主、伊藤初代氏は、題名の如き俱樂部を設立せんとて、目下計畫中と聞く。其の目的は學術技藝の交換を初め、女子の將來に關する一切の事を協議し、專ら品行を方正にする等なりといふ。

○喜び記るす

岐阜縣多治見町の某々の兩氏は、先頃許可を得て近地に遊廓を設置せんとするを、町會の決議により、町民九百數十名の連署を以て、右指令取消の議を請願せしに、聽かれざりしかば今度は内務大臣へ請願せんとて、其の願書に調印せるもの一千二百餘戶の戶主、一千百五六十名の多きに及び、なほ近隣諸村にても此の請願を賛成するといふ。吾人は喜んで記るを。

廣告



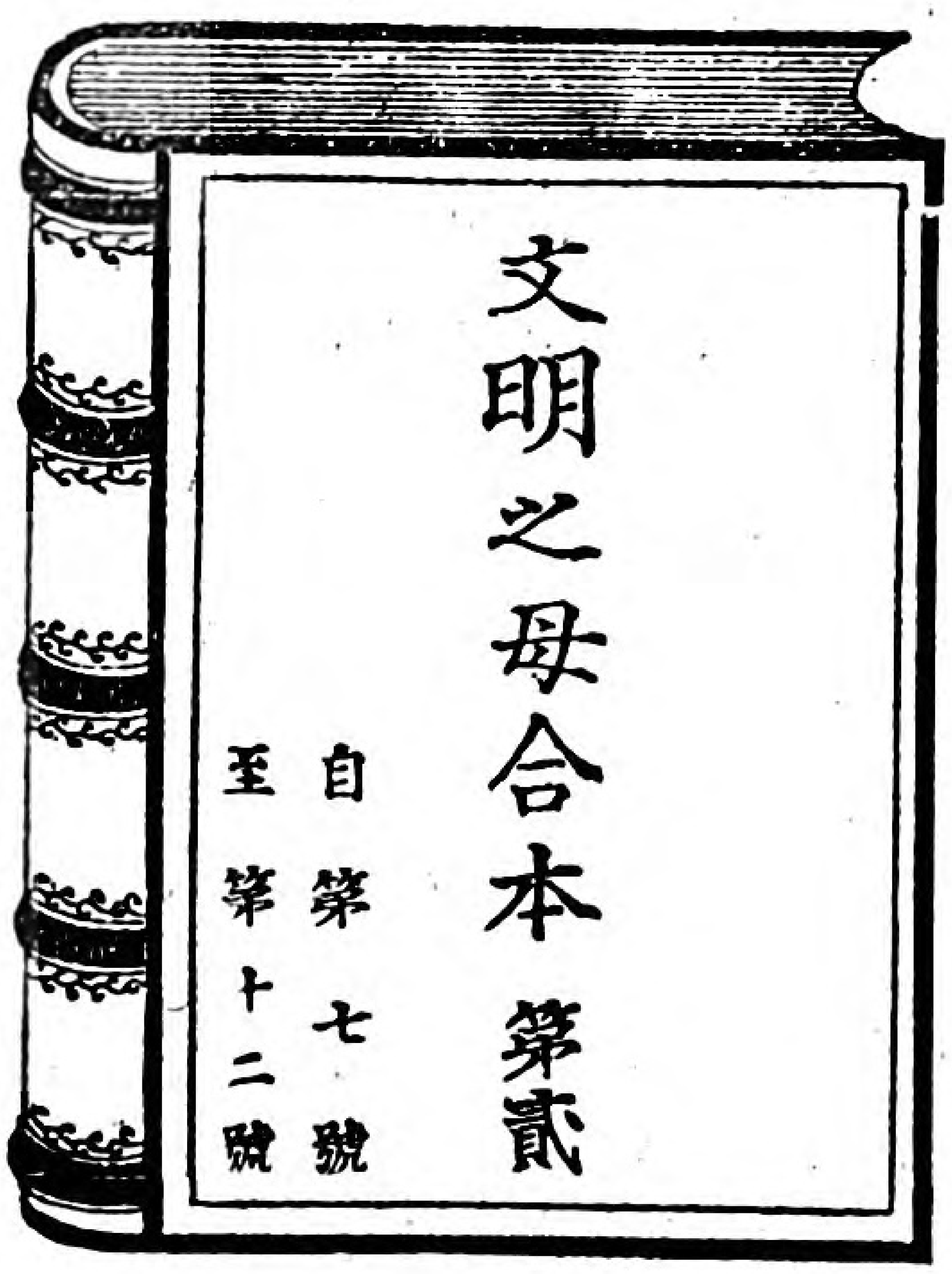
紙數凡四百頁

定價

上製 五十五錢

並製 五十錢

全國無遞送料



紙數凡五百頁

定價

上製 六十錢

並製 五十五錢

全國無遞送料

目次は左の如し

文明之母合本第一目次

文明の母合本第二目次

社説

論説

家政

文藝

○花野見にゆきて……竹屋雅子 十二、
○四海大平記大納言局録……二十一峯外史 十二、

小説

○水仙花……鐵筆將軍 八、九、十、
○岁夫傑女譚……山縣悌三郎 七、八、十、十二、
○吉野川……鴨立庵主人 七、十二、
○刺客……鉄筆將軍 九、
○でも叔女……鐵筆將軍 十一、十二、

批評

○皇朝記事文集の批評を讀む……五溪山人 八、
○新著百種の掘出し物……鉄筆將軍 八、
○長歌改良論辯駁辨……佐々木弘綱 九、
○皇朝記事文集批評を讀む……二十一峯外史 九、
○文明之母文藝の批評……柳園主人 九、
○唐松操……鐵筆將軍 九、
○日本文學の三絶……饗庭篁村 十、
○自著自笑……南翠外史 十、
○級長戸風端書……沼田順義 十二、
○日本華文○れ八重七○新著百種の色懺悔七○學校家庭遊戯全書七○國の基七○日本文學七○自笑粹誌七○殺人犯八○智識八○新増補浮世繪類考十○女子の務十一○文藝十一○三人孃十一○學藝問答叢誌十一○美人十一○小説文庫十一○小説叢十二○北陸婦人教會雑誌十二○色界の燈十二

雜録

○寶物取調に就ての所見……川田剛 七、九、
○コルセツトの来歴……鑑湖漁史 七、
○コルセツトにつきて……芸通路太夫 七、
○佳人の爪と其性質……鈍の風流士 七、
○少年子記者に答ふ……鐵筆將軍 七、
○フオスカー婦人の傳……陵北女史 八、九、
○日本の美術……リパーチー 九、
○和泉式部と小式部……衛遠樓主人 十、
○赤染衛門の話……挿畫……衛遠樓主人 十一、
○女の名……本居豊頴 十一、
○子を思ふ似呂波歌……稲葉巖齢 十一、
○ダンシングと盆踊り……翠葉史 十一、
○嫉妬心蟲押への妙法……天洲居士 十一、
○伊勢大輔の話……挿畫……衛遠樓主人 十二、
○批評せらるゝも難し七○お輕と團十郎七○婦人慈善會への忠告○餘興負けてあげます‖それでも‖新考物九‖桶屋の頭巧智十○ベルツ氏の女子教育論十○吾黨の明法官十○これはしたり‖實に然らず‖一語真に千金考物(懸賞)‖○芋と蓮‖うんよや‖新考物(懸賞)○人丸の装束十二○業平の装束十二
○婚姻の時の秋の字十二○菅公の装束十二
寄書○數件
彙報○數百件
挿畫○神功皇后御肖像七○紫式部源氏物語を草する圖八○清少納言捲簾の圖九○和泉式部小式部に教ふる圖十○赤染衛門の圖十一○伊勢大輔の圖十二

●農民之友ハ大改良シテ題號ヲモ實力ト改メタリ

實力ハ偏セス黨セス專ラ實業社會ノ智力ト富力トヲ増進シ斯國本ヲシテ鞏固ナラシムルヲ以テ目的トスルモノニシテ徒ラ政治ヲ評シ時事ヲ論スル空談ノ雜誌ニ設ス

實力ハ自ラ揣テス實業社會ノ保護者卒先者ヲ以テ自ラ任スルモノナレハ其針路ニ横ハル百般ノ妨害ハ徐々ニ排除ノ策ヲ運スヘシ

實力ハ實業者ヲシテ其業ニ關スル學問上ノ智識ヲ得セシムル爲メ專門ノ學者當業ノ大家ニ托シ左ノ諸學術ヲ誌上ニ講述ス

農學諸科（其時々最要ノ科目ヲ講シ向後三年間ニ農業ニ關スル諸科ヲ講スル者トス）

商學（其時々最要ノ科ヲ講述ス）

工學（時事最要ノ科ヲ講述ス）

實力ハ實業社會ニ往々興ル所ノ紛爭問題ヲ假設シ專門ノ法律家ニ托シテ之ヲ解釋シ權義ノ所在ヲ明カニシ以テ紛議ヲ豫防シ若シ事アルニ至ルモ枉屈ナカラシム

實力ハ農工商ノ實業ニ關スル諸般ノ質問ニ應シ誌上ニ於テ回答スヘシ

實力ハ毎月一回（六十頁以上）發行ス定價ハ一部現金八錢○六部前金四十二錢○一年分前金八十錢○全國無逓送料○本誌ヲ一年前金ニテ購讀スルモノハ特別讀者トナシ本舘臨時ノ出版物ヲ贈呈スル當種々特別ノ利益ヲ附ス

實力第五號目次

蠶絲業改良策

一冊百頁代金十二錢郵稅二錢

蠶絲ハ我國ノ經濟上至重至貴ノ者也ト雖モ內ハ則チ目前ノ浮利ニ迷ヒ斯業遠大ノ方針ヲ誤ラントスルアリ外ハ則チ伊佛支等ノ諸國或ハ其品質ノ精ヲ以テ或ハ其產額ノ多ヲ以テ我ト權利ヲ爭フ噫々蠶業ノ氣運危哉本書ノ出ル豈ニ偶然ナランヤ本書ハ河瀨秀治君。樋田魯一君。田口卯吉君。久野久君。伴直之助君。品川彌二郎君。採桑女史其他諸先生ノ蠶業改良ニ關スル高案ヲ編タルモノナレハ當業者ハ勿論苟モ經世濟時ニ志アルモノ一讀スヘキ冊子ナリ

實力一年分前金ニテ購讀スルモノハ特別讀者トナシ本書ヲ無代價ニテ呈ス

農民之友第五號ヨリ實力ト改良シ今後ハ廣ク發賣スルコトニ相成リタレハ新讀者ニシテ自然以前ノ發行ニカヽル講義等御入用ノ御方モ可有之ニ付キ新購讀者ノ便ヲ謀リ

農民之友第一二三四號取揃代金廿八錢（郵稅共）

ニテ送本可仕ニ付御入用ノ御方ハ至急御申込アルヘシ○金圓御送付ノ節ハ郵便爲替武州鴻巢郵便局宛取組○郵券代用ハ五分増シ

發行所　興農舘

埼玉縣横見郡南吉見村

大賣捌所○東京成春堂○良明堂○武藏鴻巢長島○其他

寄書

懸賞募集天長節の歌

本社に於いては獨り賞を懸けて歌と文とを募りたり。乃ち歌の題は「天長節」にして、文の題は「文明之母を讀む」なりし、蓋し皆作り難きの題なりしなるべし。加ふるに、十月十五日までに募集すべきものを、（尤も文は十一月十五日まで）九月下旬より十月上旬に廣告したるものなれば、其の間の日數も實に僅少なりき。然るに滿天下の愛讀者諸君は、老と少とを問はず、男と女とを論ぜず、其の題の極めて屬しがたかりしにも拘はらず、其の日數の甚だ僅々なりしにも拘はらず、且つ其の賞品の殊に些少なりしにも拘はらず、續々其の募集に應ぜられ、玉吟を寄送せらるゝもの、日に本社の案上に堆を爲し、十五日までに集まりし歌、無慮七百十二首に及びたるは、實に吾人の意外に出でたるものなり。諸君の厚情既に已に斯くの如し、吾人亦熱心鋭意に之れが撰擇に從事し、かりにも不公の處置あるべからず。吾人之れを以て念となし、乃ち通讀數十回、いとも丁寧に、いとも緻密に之を撰擇し、已に之を撰擇したるの後、尚不公なるあらんを恐れ、或る文學博士に諮り、有名な

る歌仙に質し、而して漸く撰擇の結了を告げたると左の如し。顧ふに歌なるものは、其の見るべき所、取るべき所、極めて多端にして、一方の撰者の可とする所、或は一方の撰者之を可とせざることあり、一方の撰者の取る所、或は一方の撰者の取らさることあり、作るより評しがたきの歎は、古來より然るなり。故に吾人の斯く撰擇したるの外、尚ほ他に數多のこがねの聲、玉の響あるは疑ふ可からざれば、又秀逸と覺ぼしきもの十餘首を次號に掲ぐることゝせり。殊に言ふまでもなけれども、此の度の募集に賞を得たればとて、決して滿足を可からず、又此の度の撰擇に漏れたればとて、必らず失望をべからず。尚ほ本社に於いては、屢々懸賞募集の擧あらんことを欲するなれば、得たるもの又此の次にも得んと欲し、得ざるものは又此の次にこそ得んと欲し、決して此の度のみを以て去就を決せられざらんことを、切望の至りに堪えざるなり。文は來る十五日を以て閉函とするものなれば、今日までにも隨分多く集り居れども、盡く揃へさる上、之が價値を判別し、又十四號若しくは十五號に於いて、之を表白せんと欲するなり。中原の鹿誰が手に落つるか、未だ知るべからざるぞ。

一等賞

現つ神、よをてらします、み光の、あらはれし日を、あふぐけふかな。

東京　渡邊敏而

二等賞

あれましゝ、其の日と聞きて、外國の、ひとさへ君を、いはふ今日哉。

滋賀　藤田孝之

三等賞

治まれる世の、時つ風、　枝もならさず、のどかにて。
しげりそひゆく、民草の、　なびかぬ方こそ、なかりけれ、
あなめでたの、君が代や、　あなうれしの、君が代や、
まなびの道も、なす業も、　いやすゝみつゝ、栄えゆく、
わが大君の、しきませる、　やまとしまねぞ、うごきなき、
あなめでたの、君が代や、　あなうれしの、君が代や、

東京　佐々木昌綱

その大君の、あれましゝ、今日は生日の、足日ぞと、
天つ日の旗、軒ごとに、かゝげて祝はぬ、宿ぞなき、
あなめでたの、君が代や、あなうれしの、君が代や、

殊更今日は、かしこきや、日繼の皇子も、立ちましぬ、
御國の鶴も、松風も、ともに千歳を、よばふめり、
あなめでたの、君が代や、あなうれしの、君が代や。

四等賞

東京　山際松子

あれましゝ、今日をことほく、心こそ、みやこもひなも、かはらざりけれ。

京華春報

毎月三回五之日發兌

刻翠剪紅ノ彩筆ヲ以テ都門ノ繁華ヲ寫シ流麗洒落ノ妙文ヲ以テ世俗ノ狀態ヲ記シ政事ノ得失社交ノ利弊ヲ評論スルニ至テハ或ハ譏喩或ハ寓言或ハ諧謔或ハ滑稽ヲ以テシ諷諫規ヲ隱約微妙ノ間ニ存セシム是レ我京華春報一大新面目也若夫艷麗ノ筆華絢爛ノ文彩ハ記者風ニ一家獨得ノ長技ヲ有シ敢テ他ノ鑿ニ倣ハス因テ本社ハ服部撫松居士ヲ推シテ主筆ト爲シ務メテ妙篇ヲ撰ヒ奇文ヲ拔リ新機軸ヲ出スアラントス大方君子幸ニ愛讀セヨ爰ニ記事ノ綱目ヲ揭ク

時事門

奇構斬新ノ時事評論ヲ載ス

雜說門

滑稽洒落ノ雜說雜記ヲ載ス

花街門

一芳原、洲崎、四宿ノ景況及風流逸事ヲ記ス

柳巷門

一新橋、柳橋、芳町其他校書社會ノ綺話艷談ヲ記ス

詩歌門

新調秀逸ノ詩歌ヲ錄ス

小說門

一政治小說、滑稽小說、人情小說ノ三種ヲ載セ繪畫ヲ挿入ス

春報定價

一冊 金七錢 十八冊 前金壹圓八錢

十冊 前金六拾五錢 三十六冊 前金貳圓

廣告料

五號活字廿二字詰一行ニ付

十行以下 金拾錢

十一行以上 金八錢

二十一行以上 金六錢

○府外ハ郵税壹冊ニ付金五厘ヲ要ス○郵便爲替ハ東京芝區芝口郵便局ヘ御振込被下度候○代價郵券ニテ御送付ノ分ハ一割增之事

目次

發行所 東京市京橋區南槇町一番地 京春社

佐々木弘綱著書新刻廣告

歌文要語解

木版和製最上美本二冊
正價五十錢郵税六錢
郵便切手代用一割増

從來語釋の書又字典の類世に多かれど或ハ煩雜或ハ省略に過て此書の如くよくして盡せる物はあらざ此書上段には記紀万葉祝詞宣命等の古言下段には廿一代集源氏伊勢土佐更科等の雅言のあらゆる難語一萬餘をあつめ平易の俗言を以てなる注解を下したり古書を讀み歌文を作る人此書を座右に備へなむ其益必多かるべし

詠歌自在

四季二冊正價四十錢郵便用摺五十錢
雜部二冊正價四十錢郵便用摺五十錢
郵税共二四錢

此書は年比哥よまんと思ひつゝ習ふべき道を知らぬ人或は家にのみ居て外に出かたき人或は片田舎に住て師のなき人たちに哥を自在によましめんとて著はしつるなれば哥をよみはじめんとせらるゝ淑女令たちふはこれに過たる良書なかるべし

みよしの帖

正價三十五錢郵税四錢

この帖はみつからよみし哥をかきしるて假字を習ふ人の手本にには最よろしかるへし

活語全圖

正價八錢　郵税二錢

伊勢物語俚言解

美濃紙大本美製
二冊正價五十錢
郵税四錢

これは動詞及てにをはの活用を理解し易からしめん爲表に作りなしたる物なれば我國の文法を學はんとする人は必一本を購ひたまふべし

此書は清水濱臣の添注に俚言をつけ頭書を加へたるなれは一目に文義を解する事を得べし

千代田歌集

美製本二冊

此書は近世の歌人の名歌四千餘首を撰入せし物なり不日博文舘より發賣すべし

文章作例集

佐々木信綱著

半紙美本二冊正價四拾五錢郵税四錢

此書は近世諸大家の和文二百五十篇をあつめたるものなれは和文を作らんとする人の作例には最適當の良書なり

歌のしをり

洋製美本一冊

此書は歌の沿革種類法則書法雅遊傳記等を論したるもの也不日博文舘より發賣すべし　猶此土佐日記俚言解竹取物語俚言解等數種刻成せるものあり

發賣所

東京市神田區小川町一番地　佐々木

同日本橋區本石町三丁目　博文舘

銀行雜誌

第二十一號　改正價金八錢十部金八拾錢（郵税共）本月廿五日發兌　二十部一圓五十錢（郵税共）

領國ト北海道●外國資本將ニ來ラントス●農業國ト製造國●秘密鑛山會社望解散●日本銀行監事安田善次郎氏ニ辭職ヲ望●川田銀行總裁ノ注戒●金融一場ノ奇態●天空任鳥飛●小人ノ心ヲ以テ君子ノ心ヲ忖ル勿レ●去ルニ去ル時アリ●今ノ内閣ハ浮萍ノ如キ乎●江湖ノ遠キニ居ルトキハ其君ヲ思フ●樞密議長ノ後任ハ誰ソ●大隈伯ノ歸途危キ哉危キ哉●條約改正ノ運命如何●中止乎將斷行乎●先ツ其本ヲ立テヨ●山縣伯ノ決心如何●井上伯ノ辭職如何ソ發行停止ノ頻々タルヤ●保安條例●草レ終レバ●濁水混々タリ●猿ノ木渡リ●其他重要事件數十件

京橋區元數寄屋町三丁目五番地

銀行雜誌社

秀抜逸岩未足稱消蓑香翁鐵筆也翁之芳名自一達九重背殿上奉刻玉璽顯妙之賞既聞天下可謂偉矣弊堂應文雅君子之囑請翁專當此業乃揭其所鐫印影以供江湖之瀏覽云爾



東京京橋區尾張町二丁目

天賞堂

朝野新聞評 ○天賞堂　尾張町二丁目なる天賞堂にてハ曩に宮内省の命を蒙して辱なくも御璽を奉刻したる鐵筆家金子蓑香翁を聘し專ら貴顯紳士墨客の印刻をなも由なり

時事新報評 ○蓑香翁の鐵筆　尾張町二丁目なる印刻店天賞堂ハ鐵筆に巧なる金子蓑香先生を聘して彫鐫に從事せしめてより文人墨客の注文增加せし由にて此程清國より李淑卿吳葆仁趙永年など云ふ文人の囑托を受け殊の外喝采を博せしよしなり

毎日新聞評 ○蓑香翁の鐵筆　曾て本紙に記載したる如く京橋區尾張町二丁目の天賞堂にてハ鐵筆に有名なる蓑香翁を聘してより大いに江湖の愛囑を博したりと聞たるが今度清國より李淑卿趙永年等の囑托に應じ直ちに其の印影を刻成して送りたりと云ふ又目下清國よ滯在中なる岸田吟香翁ハ同國風の印影を遥々同家へ注文し越れたる由

紹介

溯天下之通人粹士

醉多道士批選笑註

抱腹絶倒詩選

全三冊　特別廉價金三拾錢　全國無遞送料

此書何爲而作焉曰爲天下泰平國家安穩祈禱也。凡狂詩者以見笑爲上出來。狂詩雖有迂下良々々矣。况抱腹絶倒於抜早腰乎。殊此編基孔子所謂笑門福來也。余豈作擾亂天下域法界之書物者耶。

洛陽狂客　醉多道師醉拂識

此書係醉多道士批選也。爲無看版。而各府縣有名之投書家君。爲之撿考正字。於是乎。狂詩之什。上腮與下腮撲當放題者。載無餘蘊矣。冀四方通客粹人。得一本女子所惚。

發賣所　東京日本橋區大傳馬町二丁目　文昌堂謹白

附言

此書定價金五十錢。而得名詩三百八十二首。今將算盤二一天作一詩當凡壹厘三毛强抑天下安物雖無若拂稅買保護者比之此書其差如何嗚呼安哉乎

(遞信省認可)

明治二十二年十一月三日印刷出版


文明の春 第十二編 附録
故郷 佐々木光子
南翠外史
美人車 思案外史
八重菊

戀しき故郷（十六句今やうぶり）

佐々木光子

みぎはのさくら二葉三葉、
つゝみ傳ひことめくれば、
水のうきゝりや、それて、
さやけき影をおがむれば、

ちりてながるゝすみだ川、
みやこの秋も
さびしさは、
雲間の月こそいでたけれ、
いとゞこゝろぞ晴やらぬ、

年經てをみしふるさとの、いへをはなれてはや三年、
かきねの桃もみをせへむ、あるてふ物を　おのが身は、
波間よりうかぶみやこどり、いざ事とえんなつかしさ、
わが　ちゝはゝは　はらからは、いへど答へぞ　あそぶなり。



●流行の下遷　　南翠外史

十月十三日、我が日本演藝協會は、鹿鳴館に於いて諸藝演習會を開きぬ。この日宮方にはさゝはり在らせられて、一二の御息所のみ臨ませたまへり。御息所は綾羅の洋服に、寶石のあたり耀やかしさを召させたまへ、駝鳥の羽毛うつくしう飾りく、金剛石の光りまばゆき戴冕を召させられけれは、御裳の娓々として曳けるなど、御装ひいと神々しくぞあふがれける。此のほか貴婦人のつどひたまへること、去年の發會のときのやうにはなかりけれども、正面四列がほどの椅子は、いづれも美しきあたりに占められけり。見まゐらするまゝ〳〵、雨夜の月旦せんは、いと畏こう憚りおほきことなれども、なべての御装ひ優ふやさしく、洋服めさせられぬは品よき丸髷といふものを結むき、白襟紋附には種々の丸帯を帯びさせたまへるさま、發會の刻みには勝して優美なり。少き方さまの、高髷に摸様もの召させたまへるが多くて、帽子下地の束髮に、油氣なきおぐしの髮鬆たる

をそこらせたまへるは稀なりき。　たま〳〵いたいけなるが、香るもの燻きこめて下げ髮にしたまふも、リボンを用ひたまはずして、金絲もて房長に結はれたるは、けだかう優かなり。　劬なきはおさなげに紅幽禪の對無垢、おなじ様なる被布を纏はれて、彼の意氣とやらんいへる部分を脱したまひたるぞ心地よき。　そが中に立ちまじらふものあり、同じ白襟紋附にて形のごとく盛裝を凝らし、髮も品よき丸髷に目立たぬ手柄を添へ、中挿の笄も、後挿の釵も、甲物のみをもちひけるが、風俗に精しき人は一目して、渠は鹿鳴館に入るをゆるさぬものぞ、別けてかしこき御まへたりと膝を交ふること不埒なり、と申しき。　さては化粧のもの、紛れ入りけるよ、如何にすべきと、評議しけるに、心優しき人は世をしのび姿をやつして來しものを、摑み出だすは情をしるものにあらじ、知らぬ顏するこそ長閑なれ、といひしが、或人はまた頭を掉りて、否とよ、渠が衣服は式にかなふものにあらず、たゞ姿のよかれかしとて截ちたるものなれば、衣紋つきをみても知るべし、

會長の子爵、副會長子爵かつて夫等をしろし召さねばこそ、貴婦人をもて過せらるゝこと、口惜しきかぎりあるべしと說きぬ。さて議論排郤の方にかたふきつれば、直に嚴そかなる調をなして場外に退け、あとは淸き大氣の芳香を含みて通へるに至りき。去年に今年は上つ方の風俗は、斯くまで流行を一新したまへり。

總じて上をみならふこと奢侈のもとゐなり、井原西鶴が胸算用に、

近年はいづかたも女房家ぬしれでりて、衣服に事もかゝぬ身の、其の時の浮世摸樣の正月小袖をあくさ、羽二重半疋、四十五匁の地緡よりは、千種の細染、百色がはりの染賃は高く、金子一兩づゝ出して、これさのみ人の目だゝぬ事に、あたら金銀を捨てける。帶とても昔渡りの本繻子、一幅に一丈二尺、一筋につき銀二枚が物を腰に纏ひ、小判二兩のさし櫛、今の直段の米にしては本俵三石、頭に頂き、襠も本紅の二枚重ね、白絖の足袋はくなど、昔は大名の御

前がたにもあそばさぬこと、思へば町人の女房の分として冥加恐ろしき事ぞかし。

とありて、二百年の前つ方には、所謂上の好むところ、下これより甚だしきはなしの原則に遵ひ、もはら上品なるを羨みまねびて、流行を衒ひたるものと知られたり。

文化文政の治世、下態の風俗や、奢りの沙汰とかへりみず、競ひてよき衣着るやうになりければ、屢ば節儉の御主意とおほせ出だされ、奢侈を戒められけれども、柳營にては泰平に任せて、量りなき驕奢を極めたまひたるより、其のまねびてぞ憚りはあれ、奢りに押れたる人心、忍び〳〵に贅澤三昧をきそひたる程に、契情の染模様、御殿模様[illegible]は勝して粋なりとたゝへ、唄妓の島田髷、今様にして愛らしと賞で、彼を遷し此に倣ひ初めて、我れも彼れもと流行を趁ふに至りぬ。斯く流行の源下態にうつり来て、芝居といふものまた流行を生む母となり、色は路考茶、

梅幸茶なんどあり、下駄に小町芝翫、半四郎形なんどあり、甚だしきに至りては、宗十郎頭巾などいへるもの、武家の頭を被ふにれよべり。是れいにしへのみに止まらず、延ひて今の代に及ぼして、處女に福助の着付をうつし、我れ流行に先んじたりとほこるものあれば、貴婦人に藝妓の染色をまねび、一向意氣なりと信ずる方ざまあり。此の勢ひは風俗の階級なき社會を壓して、今は貴賤おしなべて、たゞ忌まはしきあたりの鄙びたる風俗にながれ、系圖だゝしき夫人も、そのむかし月の宴にはんべりて、殿の御心をなぐさめ奉り、千金もて贖はれたるものにはあらぬや、など忍ばしむるぞ口惜しき。

水は高きに發して低きにながれひろごり、雪は天より落ちて地をおほふものなり、上より下にをることと、ものゝ順なれば、流行もまた上より下にするこそよけれ。奢りの沙汰といふ一點は流行てふものにありて、上よりするも下よりするも、費に差別はなかるべきぞ。同じおごりの沙汰といへれ、費をかくるほどなら

ば、風俗の高尚なるが見よし。上もし源とならは、そのみなもとは廣からずして、及ばずところ廣ければ、優美にして淳朴なる風を布きそめたまはんには、一般に淳朴なる風となりなん、これ「文明の母」が社會風俗の爲に、つとめたまふべきもの、一なるべし。　鹿鳴館にて見まゐらせたる貴婦人の御裝ひ、去年に今年に著るき差別ありけるが嬉しくて、さそは思ひ寄りたることゞもを併せとゞめつ。



美人車

飯臺思案外史作

其一――泪ににぢむ乙女が襤褸の袂。

「ア、もうそろ〳〵店を仕舞うとしやうよ(一寸考へ)時にもう何時だらう、今晩は雨が降る故か、さツぱり客が無い。(ア、と溜息一ツ)サア〳〵形附やう〳〵。

云ひながら立膝をして、店先にいろ〳〵列べ飾ツてあツた煙草を取形づけ、夫れ〳〵箱の中に入れ、玻璃戸をしめて錠を下し。今迄車の下へ列へて置た足駄を出して、それを穿きながら、外に吊してある暖簾をはづして、チヤアンと畳んで、烟草箱の下へ入れ。

「まづ　これでよい。

吐息を洩しながら、自分が今迄据ツて居た脇に置てあツた二子の絆纏を一寸前

の方へ出して、店の隅にあツた更紗の包につゝんである辨當箱を其脇に並べ、ソンテ前の絆纏を引ツ掛け、店の兩側に吊してあるランプを下して一箇を消して仕舞ひ、一箇を外へ出して、車の前庇の下――雨のかゝらない處――へ一寸置いて、雨戸を二枚立てゝ仕まひ、ランプを梶棒へ結び附け、今迄車の隅に立掛けてあツた毛繻子の蝙蝠傘を廣げ、片手にさしながら件の車を精一杯の力で押して道路の隅――往來の邪魔にならない處――へ挽いて行ツて、

「まづかうしておけば明朝まではいゝ。」

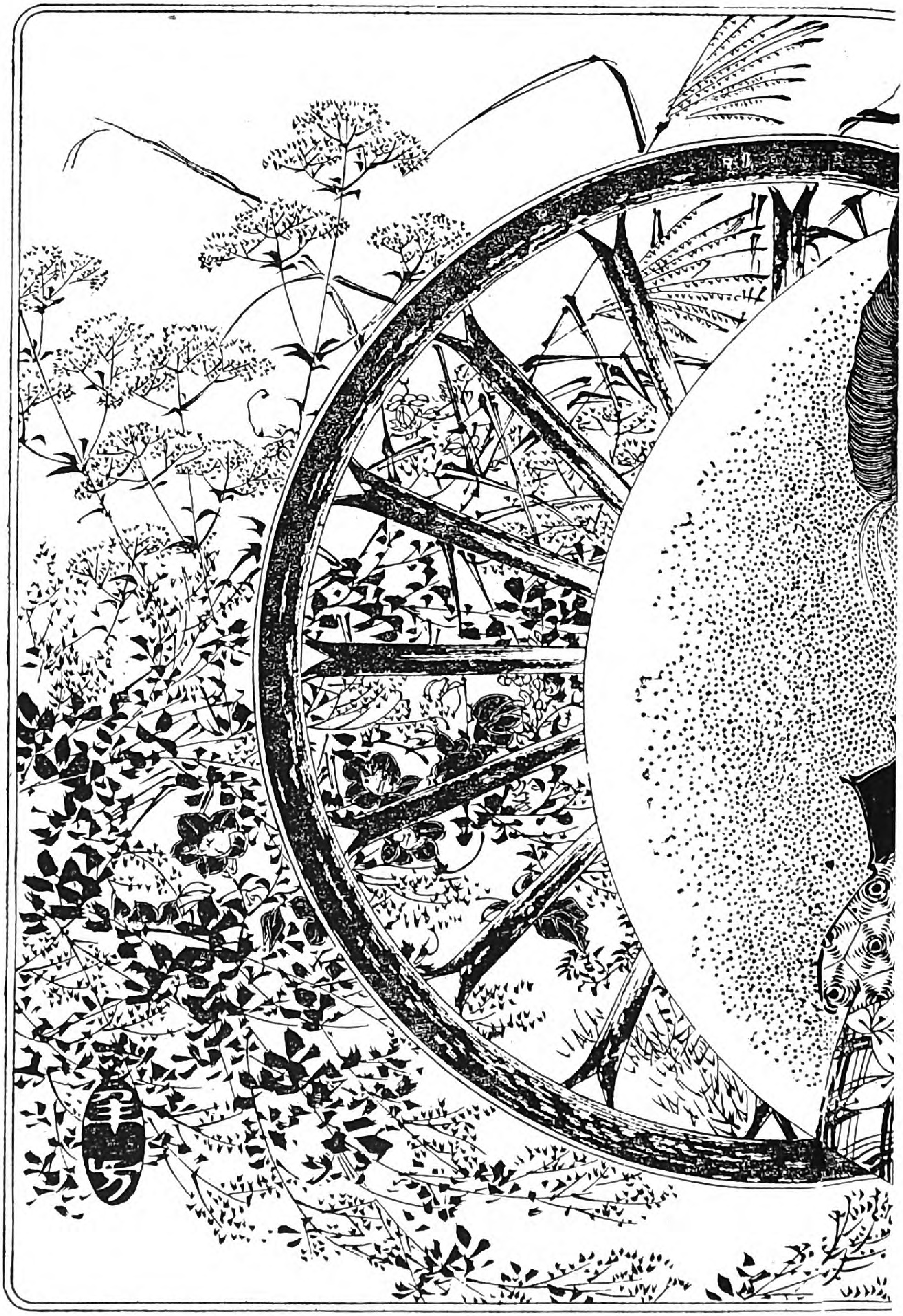
呟きながら、いそ〳〵お茶の水の茗溪坂を昇り行く少女。夜目でよくは分りませんが、此時小雨も全くあがツて、美人の眉とも見ゆる破月が、とぼき松葉の散形を巧に地上に染めて居ます。唐國の赤壁に譬へるお茶の水の流も其音微に、往來も途絶へて只シンとして居ます、時々聞こゆるのは土手の秋草が風に揉まれて戰ぐ音ばかり。朧な月影で彼の少女をすかして見ると、年はさうです、

兩方の指を折ツて未だ七ツ八ツは餘るでせう。何時結ツた島田髷ですか、酷く亂れてタボ杯は無下にヒシヤゲて、後れ毛が四五本、可惜薄桃色の頬を窘めて、そうして前髮の先が太い一の字を富士額に畫いて居ます。顔は寧ろ瘦方で、目は少し凹んで居ます、が、何處となく愛嬌――どうとも云へぬ―愛嬌を持ツて、笑ツた時は嘸……と一寸見てさへ思はれます。夫に濃過る程の眉、これが中々の愛嬌を增させます、が、通ツた鼻筋が此愛嬌の幾分を妬んで居る樣でも、狹い唇、淺らをともなく、

「ア、　妾程世の中に不仕合なものはあるまい（鳥渡首を傾け）ト云ツても今更仕様はないが、アー思ひ出しても悲くなる、妾が三歳の時、揃も揃ツて兩親とも沒なり、妾は兩親の顔さへ覺へて居ない位、兄弟とても妾タツタ一人、アノ御親切なお叔父樣御夫婦が引取ツて下すツて、着物から、何から何までイカイお世話――親が無くても子は育つ――と云ふ通り、妾もお兩方のお

蔭で一人前の人間になツたが、お兩方がよくして下さるだけ、妾もなんだかさう／＼御厄介にもなツて居られない樣で、これが男であツたなら、どうともして、車を挽いて……も叔父樣御夫婦位ゐお樂におさせ申す事が出來るが女の悲しさ……何一トつお兩方のお手助も出來やアしない。さうかうして居る内に叔父樣がアノ御大病、叔母樣だツて、年ハ寄ツていらツしやるシ、只氣ばかりあせツてどうなさる事もお出來なさらない、かう云ふ時こそ日頃の御恩報じハ……とは思ツても女子の悲しさ、たとへ此身を浮川竹に……所詮物堅いお兩方、お聽きなさる筈もなく、なんぼなんでも勤の身ハ……若しアノお方にてもお遇ひ申した時ハ、なんと妾がお云譯を……兎つおいつ思案に此頃ハ夜もろく／＼寐附れ無い程、考へて居る處へ、不圖お隣家の内室が、アノ新聞を持ツて來ての話、早速ソノ本店へ行ツて今でハ……
思ハず空を見上げて、太い息を吐く。





「商賣とハ云へ、終日店先へ据ツて往来の人に顔をさらす其つらさ、トハ云へ此もみんなお兩方の爲、勿体ない、つらいなんぞと。ア、もう思ふまい／＼、夫りやアさうと今朝店の前を立派ふ黒塗の手車ふ乗ツて通ツた、官員風のお方ハ、どうも……若しや……が、アア違う譯ハない、イクら長い間れ目ニ掛らないツて……が、どうも口元杯ハソツクリ、彼方でもしお／＼妾の顔を……若しや……よしンバソノ方ましろ、今の妾の此風俗でハお目に掛られた義理でもなし、ホヽヽ、妾とした事がまた何方だか分りしもない内から……ろれより少も早く歸ツて叔父様の御看病でもしませう、又歸途にハいつもの處でお酒を買ツて行ツて、叔父様のお喜びなさるれ顔を見ませう。

考に路も果敢／＼しく行きません。少し行ツてハ立止り、立止ツてハ又歩を進めまも。誠ふ不憫な小女、他の見る目もいぢらしい程。

「ヲヤれ歸りかい、今晩ハ常時よりチツト遅い様さねヱ、

「ハイ……ツイ……　雨が降ツたもんですから、

「今日ハ雨が降ツたから、嘸おまへが困ツて居るだらうと、今方も叔父さんと話して居た處だよ。

「ヲヤ　さうでございますか、叔父様の御病氣ハ如何てございませ、今朝と別段れ變もございませんか？

「ア、　別段變ツた事もないよ、

「アノ　こちらにいつもの御酒を買ツて參りましたから、どうぞれ上げなすツて……それ共今ぎよしおツまいらツしやいませか？

廣くもおい部屋の中、病人も此聲が耳に入ツさか、病苦を聲ま現れし、

「おりやうが歸ツたかい？

叔母ハいそ〱

「ヘイ、れりやうがいつもの御酒を買ツて參ましたら、只今召上りますか？
「ア、それなら少許おくれ、
暫くさツて、叔母ハ温く燗とした酒を、杯につ いで枕元に持ツて行きました、
病人ハ一口味ひながら、
「ア、れいしい、（舌甜りしながら）私もりうやツて病氣になツてから、何も喰べる事も出来ぞ、又喰べやうとも思ハないが、只此寐酒の一杯が何より……からやツておりやうがよくしてくれるに附けても思ひ出すが、世が世なら……
……──またこんな事を云ふと兩人に笑ハきるが──これ程までに落ぶれ果つる尾羽枯雄でもなかツたが、時勢の變遷にハせん方なく、かく浪々の身の上、れりやうとてもまた其通り……と今更云ツても仕様がない、アハ、、、
僅に苦しき笑を装ふ、
「アレまたそんな事をキナ〳〵思召さずに、御養生を御大切に少も早く御全快

おさいまし、あんまりいろ〳〵な事と御心配なさいますから、ツイ御病氣にも障ります、ドレお肩でも揉みませう。

親切に介抱する可憐の少女、病苦に弱る不憫の老翁。悲し涙に嬉し涙と混る、

「アヽさうでございますとも、おりやうの申します通り、あまりいろ〳〵お考へなさらないやうに。

跡は涙、先立つものも涙。小夜更けて身に滲む秋の風、破障子が隙を掠めて音淋し。

（嗣出）



○八重菊

鐵筆将軍

上の巻

『おぼつかな、秋はいかなる、故のあれば、すゞろに物の、悲しかるらん。』實に秋ほどふさびしきはあらじ、殊に其の夕暮の空、物憂しといふもなか〳〵に愚なり。入相つぐる遠寺の鐘、其を聞きいそぐ晩鴉、飛びゆくさきは野か山か、野邊より山に入る鹿の跡ふき送る荻のまた風、あだにもなびく花薄、薄に鳴ける蜻蛚や、葎にをだく促織虫、嗚呼いづれか腸を斷つのしろならざらん、いづれかあはれを催ふすのたねならざらん。此の夕景色をみては、心なき身にもあはれは知らるゝといふものなるを、心ある身には果して如何、物思にまづめる身には果して如何。

くれむつの鐘をかぞへながら、力もなげに手鍋さげ、はや半扉朽ちうせたる

諸折戸をくゞりて、おのが家に入らんとする一人の婦女、年の程ハ二十三四なるべし、花の顔、柳の腰、世にも稀なる美人なれども、如何なる故にや、どこやら愁を含み、憔悴れたる態さへ見えたり、さあれ、眼ハ星のごとく、口元しまりて、冒し得がたき威風あるハ、かならず凡ての素性のものにあらざるべし。廣くもあらぬ家のうちハ、いと寂寞にして、人なきと思ひの外、苦しげなる咳の聲と與に、

「八重菊八重菊、居らぬか八重菊。」

と、呼ぶものハ八重菊の夫、秋野七郎茂。年頃三十前後にしく、其の顔色ハ光澤なく蒼ざめ、眼陷りて頰骨露ハに、加之月代いたく延び、手足いづれも瘦せほそりて、見る姿とてハ更になし。然れども青色だに去らバ雪の膚、尚墨をも欺く髮の毛に、蕾とも見ゆる口元、目鼻立も能く齊へたれバ、其の盛なりし越し方、左こそと思ひやらるゝ。今しも苦しき聲音にて、續けさまに我が妻を呼

びたれども、聞えずてか、返答もあらざれバ、又も
「八重菊、居らぬか八重菊。」
「此處に居はべる、藥煎じて。」
答ふも流石よ曇り聲、曇りがちなる秋の空、暮れ行くさきを打見つゝ、八重菊は藥煎じてありたりしが、所夫の病痛を一日——おろか——片時なりとも、早く癒さんものと、一念こめて煽ぐなる、團扇の風音たゝけれバ、響よ呼バれて聞えぬも理なり。煽ぎながらもしかすがよ、過ぎ越し方や將來を、思の鍋よ入れもて來、演繹法や歸納法もて、心の焔に煎じ詰め、煎じ詰め、更に餘念えなきものから、胸の思も藥とゝもよ、はや熬りつかんと思ふ頃、又も所夫の聲として、
「藥はいらぬ、此處まで來ずや。」
訝かしみつゝ、八重菊は、所夫の枕邊に行きをれバ、善くもあらぬ容態なるよ、

床の上に胡坐かき、如何にも思入ッたるさまなり。八重菊はいよ〳〵訝かしみ、

「そや藥はいらぬ、とは何事？」

七郎は八重菊の顔をうち贍り、咳をも交へて、

「これ八重菊、その疑は理ながら、よく聞くよ、吾和主と宿世如何なる縁ありけん、ともに三の君（楠正儀）に仕へまつるとき、假初の菊見の物語より、法を侵してのいたづら、忽ち君に聞えて、御手打にもなるべきを、君の深き御情にて、勘當……勘當せらるゝも、全く捨てたまへしにもあらじ。『何處のはてゝに在るとても、功もて自償ふをな忘れそ』と宣へき。その有難き御言葉、今尚耳にぞある。あそれ、一たび君の爲に長刀――彼の覺えある長刀提げ……と念じ居たるに此の病苦、日增に弱り果てゝ、無益に病の床に打伏することの殘念さ。彼處に戰ぞあると聞くたびに、矢一筋なりとも、君の爲に射て見んと、腕こそ握れど、無念、五躰のあがきも儘ならず。なく空しく齒を切り、徒に心ばかり

ま過ごすこと、はや三年となりぬ。嗚呼、埋木は再び華さかぬ。噫、八重菊、驚きそ、噫、われは。」

改ツたる言葉に、八重菊は、今まで伏沈みてありたりしが、キツト起き直り、重き目上げつ。七郎はほゝゑみて、

「噫、吾は斯く宿病に苦しめられ、存命がたきを知れり、けふ死なずば翌日死なん、よし翌日死なずとも……」

いはせも果てず、八重菊は、遽たゞしく、

「これ何を宣ふずらん、今日よ翌日よと、よからぬ祥をいろがせたまふ、御心の程解しがたし。能く身を養ひ、早く病をおこたらせ、君の御役にたゝまくほりしたまはずや。」

七郎は呵々と打笑ひ、

「わが妻よ、八重菊よ、よく聞かずや、吾いかで故なく死を急がん、されど、死

期遠からぬ痩腹、今面りかきさばき……。」
「何をのたまふ、れん言葉とも覺えぬ。」
「まが深き心の裡を知らざれば、さ思ふも無理ならねど、君への忠、また止みがたければ………。」
「いたづらに死して君に忠とは？　早く病をおこたらせてこそ………。」
「それ吾も知り居る事、吾病中に在りても、時々磨ぎし矢の根、はや三十六本、其を見ぞか。されど我が君には……聞けば………噫、八重菊。」
語り來りて涙うちかみ、拳を握り、齒を切り、
「聞々ば我が君には……チエー殘念……天魔に魅いられたまひしか。何ぞや、南朝を去りたまひしとは、北朝に降り給ひしとは、逆賊足利に與せられしとは。實に我が君に似合ぬ所行……天魔……逆賊……我が君……。」
見る／＼顏色朱を濺ぎ、髮の毛逆立ち、くひしばりたる齒をいよ／＼つよく…

……握り詰めたる拳をますく〳〵かたく……。聞くとひとしく八重菊も、
「十二我が君が北朝に降りたまひしとや。」
七郎は太き溜息つき、胸なでおろして、
「實に我が君とも覺えぬ、朝臣（楠正成）よりの……あの……忠義を々がしたまふにや。朝臣が一の君（正行）を、櫻井より歸したまふ時、『利の爲に義を忘れ、まが多年の忠をな傷けな、』と呉々もいましめたまひしと聞く。見事、一の君は二の君（正時）と與に、其の誡と能く守り給ひつ。然るに何ぞや、三の君は――言ふさへ忌ましし――北朝に……足利に……。嗚呼昨日まで金剛山の絶頂に、高く、ゆかしく、勇ましく、飄へりし菊水の旗も、今は何處に如何なる風に靡くらん。思へばいとゞ……。」
「思へばいとゞ胸もさ々んず。世には我が夫の如くに、勘當されし身にてありながらも、疾病に苦しめられてありながらも、君の爲には矢の根磨ぐものある

に、三の君は……主上に彼れ程の寵遇を蒙りながら、猶多くの手勢を具しながら、敵に降り給ふとは、實に淺猿しや、なさけなや。それ兎まれ、我が夫は、何故に自殺などとは……。」

「それ故ぞある。和主もよくもの、道理を考へ見よ。忠とは唯戰場にて敵に渡り合ふのみならじ、又生きて君に仕ふるのみならじ。箭ひとすぢ得射ずとも、君に先ち死ぬるとも、君の御爲になるぞ忠なる。吾斯く病苦に困しめられ、潔く戰場に向ふ事、とてもかなはず。又ながらへて久しく君に仕へまつる事、固より能はず――我が妻、八重菊、いかで泣くことやある、能く聞かぬか――今三の君の彼の所行を見、苟にも臣として、諫めずてやは止むべき、されど吾行歩不自由にして、又君を訪ひがたし、そのうへ勘當うけし此の身、一の功をも得立てずは、爭でおめ〳〵として君に見えん、何の顏さげて君を諫めん。されば今此の身を果たし、もて諫めまつらんと思ふ――なにを泣く、八重菊――吾

死せば、わが首提げ、わが君の前に持て行きて、吾が死して諫めまつりしことを言上し、而てわれに代ツて、又能くまでも諫め奉き、容れたまはずばそれまで、萬一用ゐたまはば、實に……實に……嗚呼、生きての忠は望なし、死しての忠ぞ吾つくさん。」

道理にせめられて八重菊は、暫し無言にありたりしが、雨と降る涙を拂ひ、

「それは理なれど、噫、我が夫、七郎ぬし、ほかに仕様もなきものか。今年やう／＼五歳になりたる、彼の愛らしき二郎を殘し、よくも氣強く、まア……——二郎といへば、日もはや暮るゝに、如何なる面白き事あるか、遊びに出しま、還り来ぬ、實に童ぞうし——。」

「これ、八重菊、和主も武士の片われ、しかも和田の一族なるに、女々しき事な言ひそ。此の七郎が、此の茂が、爭で君の爲に子を顧みん。」

口にはいへど、心には流石かなし、眼には泣かねど、胸には涙みつ。見る／＼、

枕の下より一刀引き出だし、拔放さんとする程に、八重菊ハ瞞て、腕に縋り、

「この事のみハ。」

いふ聲も枯野の蟲の音。七郎ハ拂ひのけながら、

「其處退かぬや。」

「許させ給へ。」

「妨げすな。」

「なう。」

八重菊ハ、刃を奪んと喘逼りつゝ、滚着きてハ揮拂られ、揮拂られてハ滚着く。

「放せ。」

七郎ハ怒の高聲、

「喃。」

八重菊ハ尚貫縁る。果しなければ七郎ハ——病み衰へても勇士——わが妻を楚

と推伏せ、襟かきわきて袿衣推袒き、氷なす刀尖を腹へぐさ、引き繞らせしが、血汐沸き出す。尚眼を見はりて、

「八重菊、かならず犬死たらしむな！…………。」

此の語が此の世の言ひれさめ、敢なく命ハ絶えにけり。命ハ絶えて佇る、八重菊ハ身を起す、身を起してそがま、亡骸ま抱き着き、よ、と泣く。折しも門邊より子の二郎、

「母様、母様、母様や、此の葡萄見そなそせ。今朝父様が咽かそくといひぬ、二郎が食ふべきに持て來つよ、あげてたもれや。」

✿　✿　✿　✿　✿

✿　✿　✿　✿　✿

下の巻

千草は踏みつけられて血に塗れ、立木は割りくだかれて箭を留む。彼處にやぶれたる陣幕、此處に傷つきたる楯、槍の折れたるあれば、刀の曲りたるあり、鏃なき箆もあれば、弦なき弓もあり。太刀をまだ堅く握れるは、誰が手ぞ、血汐流れて尚淋漓たるは、誰が足ぞ。しかも胴なき生首、首なき四大、幾個となくあちこちに散在し、五躰は具はり居るといふものゝ、太腹切られて臓腑押し出したるさへあるに、まだ死にきらで苦しみ呻くもあり。颯と吹き来る葉分の風は、血の香おくりて腥く、雲間離れし片われ月は、屍を照らして色青し。實に物凄き戰の跡――跡にはあらぞ、尚彼處には太刀打合ふ音すなり。

忽ち聞ゆる鑣の音……誰ぞ……。漸く近づく……見れば砂を煙らし――否、草を踏み越え――否、屍を蹴立てゝ、手綱烈しく掻繰りつゝ、驀地に馳せ来る武

者。鎧は緋威、兜は鍬形打ちたる龍頭、赤地に菊の花を縫ものにせる直衣を着し。豹の皮の尻鞘かけたる金作の太刀を佩び、二十一さいたる染羽の矢負ひ、重藤の弓の真中握り、白く逞ましき馬に、厚總のしりがひかけ、金覆輪の鞍れかせたる。天晴大將！　此處まで馳せ來しが、敵の揚ぐる鯨波きゝ、馬を駐めて彼方にらまへ、

「無念。」

噛み摧くまで齒を切り、唯一言。斯かる處へ後より、

「逭さぬ落武者。」

雷の如き大音聲にて馳け着けたるは、黒革威の大鎧着、白綾の鉢巻したる、六尺ゆたかなる鬼武者。一丈近き鐵材棒真額に振翳し、微塵になれと打下さんず勢。さきの大將は、無言――はツたと睨めつける。睨めつけられて彼の鬼武者、

「ヤ、見れば敵の大將――楠どの。我れは山名の幕下に無雙の大力、打物の達

者と聞えし、岡田角内、尋常に御首たまはらう。」

更に口の中にて、

「實に天の賜。」

いひつゝ、矢聲高く……打下す、受けながしたる弓は早眞二つ。再び打下す、飛退ツて正儀は弓投おきて、引拔く義光の二尺三寸、閃く、拂ふ、打下す、飛退る。暫し鬪ツてありたりしが、金の太刀は到底鐵の棒に敵すべくもあらず見ゆ。兎角する中に汗は正儀の額に流れぬ、氣息は正儀の肩に現はれぬ。八幡座目懸けて落ち來る棒……あはや……無殘……と思しき瞬間、誰とも知らぬ若武者一騎、血に染みたる長刀提げ。

「もの〱しや下郎ツ、我が君に………。」

角内はかへりみる、たちまちに長刀と鐵材棒、打合ふ物音すさまじ。其の隙に正儀は馳せ出す、驀地……

此處は深山の中。篝火たきて數多の兵士、あちこちに團欒し、武具つけたるまゝ、或は飯食ひ、或は息ふ、總べて四五百人もあらんずらん。其が中ほどと思しき處に、大將は兜ぬぎ鎧の袖はづし、熊の皮の上に座を占めゐ、直臣と見ゆるもの七八人と、酒酌みかはしつゝあり。見れば楠正儀なり。くさ〴〵と戰の評議もありし後、正儀は杯に酒なみ〳〵と酌ませ、

「實に無念なりしよ、今日の戰、約せし軍勢は一人も來らず、敵を計りて、却て計らるゝことゝなりし。しかも吾遁るゝときに……。」

語り來りて、前に在りしごとく、岡田角内に出逢ひたる事、或る若武者に救はれたる事など、つばらかに述べ、さて又、

「危うかりし、實に危うかりし、其の若武者だに來り援けずば、吾はむなしく匹

夫の彼れは、首打たるべかりしを……さあれ、若武者は岡田を討取りしか、岡田に討取られしか……憐れ、討取られつらん。免まれ彼れは誰なりしか、知る者なきぞ不思議なる。殊に黄昏時なりければ、顔も定かには見分かざりしが、二十前後とおぼしきみめよき……」

語りも未畢へざるに、一人の兵卒、出で来り、ぬかづきて、

「唯今一人の武士まゐり、君に申しあげたき事のありと申す。」

正儀の傍に坐し居たるもの、

「知らぬものゝ。」

「如何にも、知らぬもの。」

「如何なる風体のものか。」

「さなり、年の頃は二十前後なるべし、いたく傷つきて、鬢髮大童……髮の長きより見れば、女子の如くにてもあり……。」

正儀は打微笑み、
「そは興ある事になん、此處へ呼むをや。」
傍の者は首傾ふけ、
「然れど敵の……。」
兵卒
「否とよ、いたく傷つきて、行歩も自在ならで、又何事もなし得ぬさま。」
正儀
「れもしろや、疾く呼べ。」
「仰せ承はりぬ。」
と兵卒は、又ぬかづきてぞ立去りぬ。正儀はじめ一座の諸人、如何なる者が出で来るやらんと、待ち居る處へ、血汐のまだ滴りさうなる長刀杖つき、僅に辿り来つ。見れば兵卒の言ひしに違はず、漸く二十うちそとの若武者——否、女武者、

手痛き合戰したると覺ぼしく、全身血のあと斑らに、華美なる小櫻威の鎧も、はや凄き紅葉威、麗はしき白綾の鉢巻も、はやさまゞき緋あや、花とも見ゆる顔容も、赤！青！白！紫！得言はれぬ色となりぬ。うや〱しう拜伏して後小脇より差出したり、生首一つ、正儀頸伸ばして、見れば、いかに、岡田角内が首級！

「ヤーツ、汝ハ彼の岡田に渡り合ひしものよな、吾を援けて。」

女武者ハ、僅に首を擡げ、苦しきか、一言だに得いはぞ、「いかにも」といふを目でしらす。正儀ハます〱打驚き、

「さありしか、天晴、最もこし近うまゐらぞや。」

女武者ハ、いざりて二三尺も進む。正儀ハ篝の光に、つく〲と其の顔差しのぞき、ふたゝび喫驚。

「八重菊にてハなきか。」

「唯」

と答へて八重菊ははや打泣く。正儀は太き溜息つきながら、

「殊勝々々……　其の左の額に血の流るゝは、切疵なるべし、痛むやらん。」

いひつゝ、起ちて、自の懐中かいさぐり、白綸子の服紗より、金瘡の薬とり出で、八重菊を抱き、頤に手を掛け、薬塗りつゝ、

「痛むやらん、や、あごの横にも……　こは疵深し。」

八重菊は手を合せて、血ばしる眼より涙ハラ／＼。暫くにして正儀は薬塗了り、

「でも天晴な、か繊き女子の腕もて、吾を救ひしのみか、彼の剛の者岡田を討取り……。」

本の座につき、

苦しみながらも微笑みく、八重菊、

「御内方（伊賀の局）に受けし手練……。」

あとは無言、正儀も無言、一座の諸人皆無言、雑兵きたりて薪増せしか、篝火の光

以前に倍す。八重菊はやう〳〵に痛の少しく去りければ、改まりて正儀を見上げ、

「御なつかしや、君、勘當受けてより、御顔を得拝まぬと、早六歳を過ぎぬ。」

「吾も局（伊賀の局）と與に、今は彼の七郎と八重菊は。如何なる所に、如何にてあらんと、噂せぬ日ぞなかりき。七郎は如何せしぞ、七郎は。」

問はれて八重菊は、アーッと泣き伏す。

「如何せしぞ、七郎は。とく打出でよや、疾く〳〵。」

頻に問はれて涙押しぬぐひ――押ぬぐひても流るゝ涙――静やかに腰につけたる包のものを出だす。出だして徐に解く。正儀が見て、

「これ……　七郎の首ならずや。」

「如何にも所夫の首。」

「如何して……。」

「聞いてたもれ。」
と八重菊はよゝと泣きつゝ、紫ばめる唇うごかし、語り出づるは、
「聞いてたもれ、所夫七郎は實に忠義のものにはべりしよ。勘當うけても、日毎夜毎に、君の御噂ばかり。戰もあらば打出で、君の爲に花々しき合戰し、罪とが償はんものと、腕をにぎり、矢の根を磨いてありたりし中 かなしや、重き病にかゝり妾がつくす看病も、つゆ程のしるしなし。されば空しく床の上に、齒を切りてありたりしが、其の中里人より聞きつるは………。」
かたり來りて、苦しき息をホツトつき、熱き涙をハラ〳〵流し、又も語をつぎ、
「里人より聞きつるは、君の敵に降りたまひし事。あな我が君に似合はぬことや、と所夫は無念の涙……。して自害………。妾に首持ちゆきて、君を諫め奉れとぞ、臨終の語。――あー苦しや、疵の――こは坐――斯く諫めまつらでも、再び、南朝の爲につくしたまふならば、死なでもよかりしに、燕雀大鵬の心をしら

て……。妾も歸順したまふを見奉れば、はや望は足りぬ。早く冥土にゆき、語りて所夫を喜ばせん。御暇たまへや……。」

言ひつ、短刀手に……　正儀は聲うるませ

まて、しばし、八重菊、待たぬか……。七郎は實に忠の者なりしよ、されど、わが志を知らざりし。此の正儀不肖と雖、朝臣の子、一の君の弟、いかでおめ〳〵と、賊に降らん。正儀の心の中には、唯一つ……主上あるのみ。正儀の胸には、唯ひとつ……忠義あるのみ。吾が骨は主上の爲に摧かん。我が肉は忠義の爲に屠らん。されば、主上のためには、忠義の爲には、假令賊名を蒙るとも、又詮なし……。嗚呼一旦敵に歸せねば叶はぬ、其の切なさ。されど、敵兵は日に増し、味方は日に亡ぶ、兎ても牛角の戰はなしがたかり、故に朝議……吾は一旦賊に……嗚呼萬世の後までも。吾を利に趨る不忠の者とせん、父兄の忠とけがす不孝のものとせん……。」

八重菊は聞き終りて、打微笑み、刀引きぬき咽へ……血は迸る。

正儀は打驚きて抱きつき、

「ヤ、自害、早かりしぞ。」

「兎ても生くべき身ならねば、早く所夫の傍へ………。」

已にこときれなんとす。

「早かりしか。八重菊。」

八重菊は仆れさま、僅に眼みひらき、正儀の顔うちまもり、合えぬ手を合せて、

「家には二郎といふ五歳なる男子あり。よきに願ひまつる。」

「心配すな、吾子をくなけきそ、養ひとりて子とせん。」

八重菊は莞爾……息絶ゆ。

歳癸亥、足利氏内亂、楠二郎叔二南國兵一、得二三百人一、奉二萬壽寺金藏主者一爲レ主

分レ兵爲ニ二隊一、二郎自將ニ一隊一、而越智其將ニ一隊一、夜入ニ大內一、取ニ三神器一、內侍鏡爲ニ東門衛士所一レ奪、寶劍遺ニ於清水寺側一、獨擁ニ神璽一、據ニ叡山中堂一、足利氏管領畠山基國遣レ兵來攻、二郎與ニ越智一皆戰死、金藏主自殺、二郎者不レ詳ニ其所一レ出也。
と頼襄が日本外史にある楠二郎は、乃ち此の八重菊の子の二郎、楠正儀に養はれたるものなりといふ。



長島書店出版書目

東京專門學校
明治法律學校 講師 日本佛國法律學士 大審院撿事

從五位 磯部四郎先生講義 法律取調報告委員

門人 都澤敬二郎君筆記

憲法講義 全一冊

洋綴總クロース金文字入美製本紙數六百五十頁余賣價金七拾錢郵税金拾錢

附 皇室典範。議院法。衆議院議員選擧法。會計法及貴族院令講義

附録 皇族列次及衆議院議員選擧法

右ハ實カト經驗トヲ以テ法律社會ニ名聲赫々タル磯部四郎先生ノ講義セラレタルモノニシテ解釋ノ確實正當ナル文章ノ平易流暢ナル遠ク他書ノ及バザル所ナリ當時憲法ノ註釋或ハ正解等ノ名ヲ以テ梓ニ上ルモノ其數幾十種ナルヲ知ラズ然レ氏投機者ノ一夜作ニナリタルモノニシテ實ニ見ルニ忍ビザルモノ多ク只徒ヾラニ文章上ニノミ拘泥シテ毫モ深意ノ存スル所ニ着目セズ亦國家ノ基本タル大憲法ヲ謬ラシム此書ヤ前書ノ比ニアラズ憲法ノ正條ヨリ議院法衆議院議員選擧法會計法及貴族院令ノ各條ニ付確實正當ナル解釋ヲ下シ且ツ重大ノ問題ニ關シテハ一々各國憲法ヲ參照セシモノナリ此書ヲ繙キテ初テ憲法ノ深意ノアル所ヲ知ルヲ得ベシ殊ニ帝國議會ノ最モ主要ノ問題タル會計法ノ如キハ却テ他書ノ忽ニセシ所ナリト雖此書ハ務メテ綿密ニ解釋ヲ下セシモノナリ此書ヲ繙クモノ宜シク注意シテ此廣告ノ誣言ニ非ルヲ知リ賜ハンヿヲ希望ス

二

○内務大臣松方伯題辭　○法學士岡山兼吉先生序
○高橋健三先生序　○川瀬周次先生
○法學博士バストル岡村輝彦先生序　○田中迪三先生　合著

再版　市町村議員必携　全壹冊

洋装總クロース金文字
入美製本紙數四百頁

上等製賣價四拾八錢　郵送税金八錢　別製賣價三十六錢　郵送税金六錢

本書ハ歐米諸國ノ自治制幷ニ之ニ關スル諸大家ノ名論卓説ヲ參照シテ著ハサレタル者ナリ

○第壹編ハ自治全体ニ關スル事即自治ノ起因、定義、組織、集權、分權、自治ノ利益立憲政體ノ關係等

○二編ハ議員ノ資格之ヲ失フ場合、辭職、退職、人民トノ關係、撰擧ノ諸權、投票、當撰、各訴訟等

○第三編ハ市町村會ノ本義、開閉會、議事法、議決ノ諸説、吏員ノ關係、市町村組合等

○第四編ハ市町村ノ財産、市町村税、公債、各權利義務等ノ議決、吏員ノ選擧、裁決意見提出等

○第五編ハ内務大藏兩大臣、府縣郡參事會ノ監督等

其他右ニ關スル大疑問等苟シクモ自治代議機關ニ關スル事ハ大小網羅シ實ニ自治制發布後一ノ類似ナキ一大良書ナリ市町村議員吏員ハ勿論市町村住民タル者座右ニ缺ク可カラザルコトハ各先生ノ序文ニ於テモ明カナリ江湖ノ諸君續々御購求アランコトヲ伏テ奉希望候

須藤南翠外史著

再版小說　唐松操　全

總クロース金字入最上美本
賣價金廿八錢遞送税金四錢

苟くも目に小說を見る者は我が文壇の老將に須藤南翠其人あるを記せざるはあらざるべし南翠先生が文章は流麗婉曲ましして讀む者惓むを覺えざ南翠先生の想像は富贍強大にして千百盡くるを知らざ其の婉麗なる筆を以て其が豊贍なる奇思を描きたるものは我が「唐松操」とを此書唐松操なる一浪士が妖怪を退治て大いに英名を京攝の間に轟かし進んで天下の大法「」となり大義高潔の名を得るに終ると雖も其間幾多の轗軻不遇を寫して剩さず理想と見れば理想、歷史と見れば歷史、寓意と見れば寓意、其の結構したる所の境遇は讀者の境遇に依つて如何にとも觀察を下さるべし是れ「唐松操」が出色の妙地なりと爲を論より證據先づ一本を購ふて繙き給は、書肆の多辨を俟たずして快と呼び奇と叫び妙と稱へらるゝと疑ひなし

松永伍作先生演述　　蠶糸業組合中央部藏板

改正増補　養蠶術講義　全一冊

賣價二十錢
郵税四錢

該書ハ學理ニ明ニ實驗ニ富タル松永伍作氏ノ講義セラレタルモノニシテ其有益無害ニシテ實業家ノ座右ニ欠ク可ラサル良書タルコハ世間一般ノ信シテ疑ハサル所ナリ然レ𪜈之カ出板發賣ハ擧テ蠶業糸組合中央部ニ委任セラレタレハ印刷製造等ハ鮮明美麗ナルモ愛讀諸君ヲシテ購求上不便ヲ感セシムルト價格ノ廉ナラサル等ノ弊ヲ脫レス之レ此書ノ欠點トナス所ニ御座候爰ニ於テカ今般弊舖等

三

ト同部謀リ販賣ノ事務一切擔任シ價格ハ廉ニシ賣買上ハ箇便ニシ益此書ヲ〆欠點ナカラシメンヿヲ期ス請フ陸續御注文アランヿヲ尚左記ノ書籍出版發賣仕候間前書同樣御愛讀アランヿヲ奉希望候敬白

蠶糸組合中央部幹事　鈴木善恭校閲
仝　　　員　大塚良太郎著

蠶業家必携　全一冊

賣價廿四錢
郵税四錢

東京高等商業學校長矢野二郎先生
東京府尋常中學校長丸山淑人先生　賛成
遠藤孝一先生編纂

英語作文書

賣價三十錢
郵税六錢

英語ノ緊要ナルハ今更喋々ヲ要セサルナリ而シテ此類ノ書世間又少シトナサス然レトモ多クハ日本ニアリテ纂輯セラレタルモノナレハ往々語格ノ誤謬ヲ免レズ本書ハ遠藤先生嘗テ英國「オツクスホルト」大學ニ在ルノ日之カ起草ニ着手シ爾來佛都ヨリ米國ニ官遊六星霜ノ間常ニ座右ヲ離サス屡翻閲シテ語格ノ同異ヲ考ヘ誤謬ヲ訂シ歸朝ノ後尚學友高等商業學校長矢野二郎君中學校長丸山淑人君ニ計リ刪補シテ初メテ世ニ公ニセラレシモノナレハ語格ノ正確ナル文詞ノ雅馴ナル遠ク他書ノ及ハサル所ナリ英語作文等ヲ學ハント欲スルモノ此書ヲ繙カハ大ニ益スル所アルヘシ

淺井得二郎先生抄譯

英和學校用會話篇　全二冊

賣價三十五錢
郵税八錢

該書ハ有名ナル淺井先生ノ著ニシテ府下各公私立學校ノ教科書ニ採用セラレ頗ル好評ノ良書ナリ請フ本次ヲ座右ニ備ヘラレンヿヲ

英國農學博士ヘンリータンチル氏原著
日本農學士　酒匂常明先生校閲
　農藝化學士
同　蘆葉六郎先生譯述

農學楷梯　全一冊

紙質上等　紙員二百頁
實價三拾六錢　郵税四錢

學說ト實驗ト相須チテ働ヲ爲スヘキハ何事ニ限ラス肝要ノ事ナルカ我國ノ農業ハ昔時ヨリ拓ケタレトモ兎角學說ト實驗ト一致ノ働キヲ爲サス只父祖傳來ノ舊慣ヲ墨守スルニヨリ爾來進歩極メテ遲緩ナリ泰西ハ此ニ反シ學理ノ應用ヲ爲シテ駸進セシニヨリ僅々數十年ノ間ニ其進歩ノ懸隔實ニ著シキヲ見ル所以ナリ故ニ今日ノ識者ハ日本ノ農業ヲ擴張スルニハ農學ノ改良普及ヲ以テ第一ノ急務トセリ本書ハ原名ヲフォースト、フリンシプルス、オフ、アグリカルチユールト題シ英國農業博士ヘンリータンチル氏ノ著ニ係リ專ラ小學生徒ニ供フルモノナレハ務メテ日常卑近ノ語ヲ以テ懇ロニ說明ヲ加ヒ初學ノ徒ニ解シ易カラシム其所說全ク農學ノ初歩ニ止マルト雖モ理論實用共ニ先人未發ノ新說アルヲ以テ大ニ世上ノ好評ヲ博シ遍ク各國ニ傳播セリ先年蘆葉先生歐米漫遊ノ際英京倫敦ニテ之ヲ購ヒ今回譯シテ農學楷梯ト名ク蓋シ農業ノ原理ト實用ヲ論シタルハ此書ヲ措イテ他ニ優ルモノナシ苟モ農業改良ヲ希望スル諸君ハ此書ニ就テ講習セハ裨益

スル所大ナルベシ且ツ印刷ノ鮮明ニシテ製本ノ美麗ニ加フルニ代價ノ低廉ナル
ハ從來弊舖ノ世ニ誇ル所ナリ希クハ江湖ノ諸彦幸ニ御愛讀アランヿヲ

六

文部省檢定濟
○簡易科讀本　安春之助著　全六冊　定價金四拾九錢

文部省檢定濟
内田嘉一
岡村增太郎　同編
○實用讀本入門　尋常科　全二冊　全　金拾壹錢

文部省檢定濟
内田嘉一
岡村增太郎　同編
○實用讀本　尋常科　全六冊　全　金四拾五錢

文部省檢定濟　井田秀生著
○國民讀本　全四冊　全　金四拾錢

文部省檢定濟　平井正編
○普通科讀本　全六冊　全　金六拾一錢

文部省檢定濟　秋山純編
巻菱潭書　尋常科
○改正教則小學習字帖　全八冊　全　金五拾九錢五厘

文部省檢定濟　鶴橋國太郎編
庵地保校正　高等科

○實用讀本　全八冊　全　金壹圓五錢
文部省檢定濟　松本駒次郎纂譯

○理科入門　全八冊　全　金壹圓四拾八錢
文部省檢定濟　川島浩編

○訂正古今紀要　全三冊　全　金五拾七錢
川島棋坪編

○校刻古今紀要　全四冊　全　金五拾錢
飯島半十郎編輯

○初學地理書　全四冊　全　金八拾四錢
小倉鍛編

○小學文林　全八冊　全　金壹圓五十三錢
文部省檢定濟　山下三子著畫

○書學軌範　全十二冊　全　金一圓五厘
文部省檢定濟
武井與三郎編輯　本多錦吉郎畫

○新式畫學本　全十六冊　全　金一圓廿四錢
文部省編輯寮撰　宮本石版摺　甲乙

○小學普通画學本　全廿四冊　全　金二圓四十錢

松本民治編輯
○新編普通画學本　山水之部　全三冊　金三十錢
同　○同　禽獸魚類之部　全三冊　金三十錢
同　○同　人類之部　全一冊　金十錢

文部省撿定濟　藤田政定著
○小學珠算書　全四冊　金六十二錢

文部省撿定濟　荒川正長編輯
○小學筆算教科書　全六冊　金七十五錢

故貝原益軒原著　川島棋坪校訂
○刪定家道訓　全二冊　金廿錢

坪井爲春編纂
○初學生理書　全二冊　金四十五錢

福井光編
○訂正修身叢語　全二冊　金四十錢

伊藤直　西村正三郎　同編
○訂正埼玉縣地誌略　全一冊　金十八錢

文部省撿定濟　久野英吉著
○英學入門　全一冊　金十五錢

青木先生編輯
○英學童子通　全一冊　金十五錢

美國謝衛樓口述　清國趙如光筆記
日本岡千仭訓點　圖入
○訂正万國通鑑　全六冊　金二圓五十錢

清國長洲沅德潛確士篇次
大日本國東京三慶岡道明卿評點
○再板唐宋八家文法明辨　全八冊　金貳圓

賴山陽原撰
原田由己訓點
○訓點謝選拾遺　合本　全三冊　金五十錢

宋黃堅原撰　川島棋坪纂評
○纂評古文真寶前集　全二冊　金七十錢
同　○同後集　再刻增補　全二冊　金七十錢

竹坪岡本先生輯錄
○古文真寶校本　全二冊　金五十錢

芝山後藤點
○四書　大字　全十冊　金一圓五十錢
同　○四書　全十冊　金一圓

七

明治廿二年十一月二日印刷
仝　年十一月三日出版

版權登録

發行兼編輯人　東京深川區諸町十三番地　中村一

印刷人　仝　區仲町八番地　小西石造

發行所　東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地　生文社